
紅葉色の青春日記

麻美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉色の青春日記

【Nコード】

N4230V

【作者名】

麻美

【あらすじ】

IS学園を紅葉色に染めてやる。
青春を自分色に染めたいオリ主が学園中を色々な意味で駆け回って
かき混ぜるハートフルラブコメディーがココに開幕！

青春日記の目　プロローグ（前書き）

自重はしない。

本格的に制御不能になるのは4日目からですが。

青春日記0日目 プロローグ

「はい次の人」

黒く終わりの見えない空間に死装束を着た人が大量にらんんでいる。黒いところに白い人が列を作っているわけだからかなり目立つ。でも目立とうが目立たまいが関係ない。

なぜなら俺たちは既に死んでいるから。

列には俺も含まれて、列の一番先には受付の様なモノが見える。あそこで天国とか地獄とか、そういうのを決めるのかな。

「（それにしても死んでなお記憶・感情があるってのもすごいな。すごいというか、残酷でしか無いと思うわ）」

長いですね。まだ俺たちの番来ないんでしょうか？」

「……………」

無視か。

そりゃあ知らないヤツと、しかも死んだ後に友好的にしても意味無いけどさ。

少しくらいは話してくれても良いと思うんだが。

「そう思いませんか？」

なにが？という表情を期待した俺が馬鹿だった。

今度は前の人に話し掛けてみるものの、やはり無視。

いや、これは本当に無視なのか？

いくらなんでも無視、というのではない気がする。

根拠はないが、死んだとはいえ感情があるならそこから中でざわざわと雑談が繰り広げられても良い筈だ。

しかしそれがない。

つまり

「（俺だけ感情と記憶が残ってる……のか？）」

たぶんそうかも。いや、それ以外考えられない。

前の人も後ろの人もよく見ればレイプ目してるし、これは色々まずいぞ。

何がまずいかって、『俺だけ』という何かフラグが満載な匂いがプンプンすることがまずい。

兎に角逃げよう、この列から。

そう思っただけで列から外れたのがまずかった。

自らフラグを回収しに行くという馬鹿なことをしてしまったわけですよ。

「キャハハ！人間が1人輪廻から外れたよ！」

「ウフフ！人間が1人輪廻から外れたね！」

その瞬間小さな黒い妖精のようなものが見えるようになった。

見た目も喋り方もベビーエルフの様な、そんな感じの。

「ねえねえ、なんで輪廻から外れることが出来たの？」

「ねえねえ、なんで輪廻から外れることが出来るの？」

「知らない。ただ逃げた方が良いかな、と思って」

「逃げる？どこに？」

「逃げる？どうやって？」

「走ったらそのうちどこかにつくんじゃないの？」

「つかないつかない！」

「走らない走らない！」

……こいつらと会話していると疲れるわ。

あとのヤツはいちいち復唱的な事をしなくていいんだよ。
っていうか妙に子供っぽいな。

いや、子供か？

「じゃあどうすればいいんだ？」

「キャハハ！一度外れた輪廻に戻るにはアンラ・マンユの力が必要
！」

「ウフフ！一度外れた輪廻に戻るにはアフラ・マズダーの力が必要
！」

ああ、善悪の二大神みたいなヤツね。
そんなものが本当に居るんだな。

「何処に行けば会えるんだ？」

「キャハハ！目の前にいるじゃない！」

「ウフフ！目の前にいるんだよ！」

目の前……ってことはこの2人がそれなのか。
ただの子供じゃないのか。

「キャハハ！驚いてる驚いてる！私がアフラ・マズダー」

「ウフフ！驚いてる驚いてる！私がアンラ・マンユ」

どっちがどっちでもいいんだよ。

さっきからクルクル俺の周りをまわってるからどっちがどっちかわからないって。

「で、どうすればいいんだ？」

「もう一回人生をやり直せばいいんだよ！」

「もう一回赤ちゃんからやり直せばいいんだよ」

「おい待て。ふざけんな。記憶は如何なる？」

「キャハハ！そのままだよ！」

「ウフフ！そのままにしてあげる！」

いや、気まずいから消してくれた方がありがたいんだが。

それに記憶を持ったまま赤ちゃんとか羞恥プレイでしか無いだろ。

「消してくれたりは？」

「しなーい！」

「出来なーい！」

「やっぱりまた人間なのか？人間だよな？流石にそこは人間にしてくれよ？」

最初の言い方だと人間以外が良いみたいだが、決してそんなことはないぞ。

一度人間を経験した記憶と感情と共にフジツボなんかになってみる。俺は間違いないく零の膝の皿に寄生してやる。

「にんげんにんげーん！でも行く世界は違う世界！」

「にんげんにんげーん！行く世界はそう、異世界！」

いい加減目が回りそうだからそろそろやめてくれよ。

「異世界？つまりどういうことだ？」

「アニメの世界！」

「漫画の世界！」

「映画の世界！」

「小説の世界！」

「フィクションの世界！」

書籍全てがフィクションだとは限らないんだが……と、それはどうでもいいか。
フィクションの世界って断定することは書籍の中でも創造物だけなんだろう。

「それでねそれでね！キミが行くのは小説の世界！」

「それでねそれでね！キミが行くのはラノベの世界！」

ラノベ？

ラノベなんて殆ど見ないぞ。

アニメ化された有名どころの禁書やバカテスなら持ってるが、それ以外はアニメ程度しか知らない。

「この際行くのは構わないんだけどさ、なにか特典とか無いの？俺の知る限りじゃファンタジーな世界ばかりなんだが」

「どうする？」

「どうしようか？」

「うーん……」

「いんなのどう？」

「そういうの無い！」

どうやら即決で決まっただけらしい。

善悪のくせして仲が良いって素晴らしいね。

「キミが行くのはI！」

「キミが行くのはS！」

「2人揃ってIS！」

揃わなくてもいいのに。

ラノベでISって言ったらインフィニット・ストラトスだよな？
男でも女でも無い、ってやつなら漫画だし。

「でもそれはあまり意味無くないか？俺男だし、ISになんて乗れないぞ？もしかして性転換が特典なんて言わないよな？」

それだけは本当に勘弁してほしい。
色々と捗らないだろうから。

「そこでとくて〜ん！男のキミにもISに乗れるようにする！」

「ここでとくて〜ん！それに加えて専用機をあげる！」

「さらにとくて〜ん！アーチャーの無限の剣製に似たものと投影魔術をあげる！」

「さらにさらにとくて〜ん！それに必要な知識もあげる！」

「そして備考！複製したものは必然的にIS武器として機械化される！」

「ついでに備考！これはISの特殊技能としての特典だから日常生活では何の役にも立たないよ！」

ここまで早口でわずから秒。

こいつら人間じゃねえ……。

あつ、神か。聞き取れた俺もそれなりに人外ではあるのだが。

今のをまとめると男の俺でもISに乗れて、乗っている時だけ無限アインミティド・ブレイドワークスの剣製に似たものの使用が可能。

知識は既に頭にあり、複製することは容易。経験は宝具と一緒についてくるから必要なし。

そして複製した宝具は必然的にISの武器化つてところか。脳内で復唱しないと理解出来ない俺って……。

「まあいい。それよりこんなにもらつていいのか？」

『似たもの』というのが少し気に掛かるが、そこまで気にすることでも無いはずなのでそっちの方が気になる。

なんせ相手はこんなくだらな話し方をしていても神だ。どんなふざけた条件を出してくるか分からない。

「いいのいいの〜！暇だから〜」

「いいよいいよ〜！暇だから〜」

暇だからサービスするつて、本当に暇なんだな。

そこら辺は人間と同じか。

暇〓繁盛していない。繁盛してないものがある。それを売るために値下げしてサービス。

神様つても大変なんだな。

お疲れだよ。

「ありがとな。どっちがどっちかわからないけど。楽しんでくるよ」

最初こそ乗り気ではなかったものの、なんか楽しくなってきた。
まあ最初はまた同じ何の変哲もない生活を繰り返すと思ってたから、
当然ではあるのかな。

「バイバイ！がんばってね！」

「バイバイ！またね！」

「または逢いたくないな。流石に3度目は御免だ」

「次はフジツボにしてあげるから！記憶を持ったまま！」

「次はフジツボにしてあげるから！感情を持ったまま！」

こいつらが言うところと冗談が冗談に聞こえないから怖い。
次死んだら本当にフジツボに転生させられそうだ。

「ふざけんな。……じゃあな」

おつ、こんなところに扉が。

さっきまでなかったから2人が用意してくれたんだろうな。
そう言えば2『人』って単位はおかしいのか？

『匹』？『頭』？『竿』？『個』？……どれも違うか。

「（ここを開けばISの世界……たぶん。俺の第二の人生が今始まる　！）」

はずだ。

まだわからないから断言できないけどな。

青春日記1日目 入学

「（はぁ……視線が痛い……）」

突然で悪いんだが、俺は今日高校生になった。

空白の15年間はとうしたかつて？

それはおいおい話そうと思う。

それで視線が痛いというのは、読んで字の如く、視線が物理的干渉力をもつかのように刺さって来る。

なぜか。簡単だ。

このクラスには男が2人しかない。他28名は全て女子。

こうなるとは15年前からわかっていたものの、まさかここまでとは思ってなかったからなあ。

「……やまくん？秋山くん？ごめんね？出席番号一番早い秋山くんなんだよね？自己紹介してくれるかな？いいかな？ダメかな？」

困った様な表情で俺に謝りまくる女性。

この人は山田^{やまだ}真耶^{まや}という名前が回文の副担任。

なにもかもがサイズにあっておらず、大きめの眼鏡がずり落ちそうになっている。

「いや、そんなに謝らなくても……」

妙に目立ってしまったせいか、クラスの半分がもう1人の男子に向けていた視線を、全員がこっちに向けて来た。

もう1人の男子は解放されたからか俺の方を見てニヤっとしやがる。

「（人の話訊いてないからそんなことになるんだぜ？）」

そんなテレパシーが送られてきた気がした。

あいつだつて背中に刺さる視線を気にしてたくせに。

あいつ　織斑^{おりむら}　一夏^{いちか}　とは中学からの付き合いだ。

五反田と一緒によく馬鹿をやった記憶がある。

「（黙れよ。お前だつて縮こまつて幼馴染とやらに助けを求めてたじゃねエか）」

えくつと、秋山^{あきやま}　椛^{もみじ}です。これから1年間よろしくお願いします」

一夏に念を送つた後簡単に自己紹介を済ませたつもりなのだが、座るに座れない。

いかにも「それで終わりじゃないよね？」「なにかやるよね？」と
というような期待の眼差しが向けられて。

これはどうしたものかな。

原作一夏同様、確かにこのまま何も言わなかったら暗いやツのレッ
テルを張られそうだ。

かと言つていきなり趣味や特技の話をするのもどうだろう。

そこまでの興味があるのかわからないから滑りそうだ。

一夏は追い込まれてる俺を見て気が楽になったのかクスクスと笑つ
てやがるし、あいつはあとで死刑だな。

パンツ！

俺が刑を処す必要はどうやらなかったようだ。

「いつ　　！？」

一夏は背後から無音で近寄つた人に頭を強打されて、頭を抑え込ん

だ。

その音が大きくて、しかも渴いているから視線が一気にそっちに向かった。

救われたぜ、一夏。

今度飯でも奢ってやるよ。

「なにをクスクス笑っている、馬鹿者」

「げえ、関羽!？」

いや、俺には呂布にしか見えないが。

華麗にISを操縦していたころは、それはもう赤兎馬に乗る呂布奉先のよう。

まあ弓の名手と言われた彼とは似ても似つかない近接の攻撃方法ではあったが、勝ち逃げする様はそのものだった気がする。

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

そんなに馬鹿馬鹿連呼してあげるなよ。

馬鹿だけとそこまで言ったら可哀相だろ。

そこからはトントン拍子に事が運び、原作通り担任である一夏の姉、織斑おりむら千冬先生ちふゆには黄色い声援が浴びせられた。

人の声の色が視覚化出来て色がわかるのは共感覚というのだが、もちろん俺にそんなものはなく、飽く迄も陰喩でありイメージである。ああ、遅れたけど女子がきやいきややってる間は暇だし、一応知らない人に教えておこうかな。

俺のいるIS学園とは。知ってる人は飛ばして読んでくれ。

簡単に言えばISの操縦者を育成する学校。

日本にしか無く、日本人以外の人間が多数を占めるものの、経営するのは日本政府。

他の国は資金も出さず、ただ授業料を払うだけ。

まあアステカ条約でいろいろ決められたから仕方ないんだ。

というか世界としては怖いんだよ、生産力すらも得た日本が。

WW2の開戦時、日本の海兵は世界最強とすら謳われた。

それなのになぜアメリカに負けたか？理由は明白。生産力の問題だ。戦争とは生産力の争いであり、兵力の争いではない。

一週間に一隻空母を作ることが可能なアメリカに、兵力でしか立ち向かう事しか出来なかったから負けたのだ。

だが今はどうだ？

世界最強の兵力と世界最強の生産力、2冠の日本を世界は恐れている。

それだから日本に全てを押しつけ、世界のバランスを保とうと必死、というわけ。

こういう過去があつて日本にしかIS学園が存在しない。

因みに兵力は過去のものではないぞ？

現在も日本の警察は世界一優秀　というより他の国の警察のレベルが低過ぎるだけなのだが　と言われているからな。

「（おっと。脳内解説してたらいつの間にかSHRが終わってる。

いや、あれ？時計がおかしいな。本来なら8時45分辺りである筈なのだが、9時50分だ。ってことは1時間目終わった？すげえ長い間やってたんだな。感心するわ。それと授業してくれた山田先生、

ごめん）」

自分ももうジジイみたいだ。

そこまで熱中して脳内で歴史を再現していたか？

そんなことはないと思うのだが、まあいい。

取り敢えずトイレ　ってあるのか？

やばい、わからないことだらけだ。

一夏に聞いてもわからないだろうし、それに幼馴染さんとどこかに

行っただし聞きようがない。

キンコーンカーンコーン！

そんなこんなを考えている内にチャイムが鳴り、2時間目の授業が始まった。

俺が如何にも考え事している様な雰囲気醸し出してたから女子は話し掛けて来れなかったらしいし、これはキモオタルート確定かも。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

ペラペラと教科書を読んでいく山田先生。

あれー？おかしいなー？全然わからないぞ？

俺だけじゃない筈だ。恐らくあの馬鹿もわかっていない。

証拠に一夏が前の方で隣を見ながらファビョってる。

かくいう俺もわからずに隣に座っている金髪の白人に助けを
あれ？

こいつセシリア・オルコットじゃないか？

隣にいたことなんて今まで気付かなかった。

「なんですの？」

セシリアはフンっ、と鼻を鳴らしてこっちを見下す様に見てくる。
まあ仕方ないか。親が親だもんな。

「いや、なんでもない」

「（なんですの！？まったく！そっちから見つめて来ておいて！）」

凝視しておいてあれなのだが、俺は興味なさそうにそつぱを向いた。それを見て向こうはイライラしてるみたいだが、授業中という分別はつくらしく、ぶつぶつと何か呟いていた。

「織斑くん、なにかわからないことがありますか？」

一夏も前で同じようなことをやっていたので、山田先生はそのやりとりで気付いたのだろう。

「あ、えつと……」

「わからないところがあつたら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから！」

「先生！」

おい、まさかあいつ正直に答えたりしないよな。全部わからないと言ったりしないよな？

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

やつちまった。

これはやばいぞ。

なにがやばいって、あいつはこういう時絶対に俺を引き込もうとしてくる。

もちろん予習なんてしてないのでわかるわけがない。

一般教養はわかる　　というか劣化するしかなかった脳が0歳から

のリスタートで再び進化し続けているのだ。馬鹿であるわけがないが、これは別。

また一から憶えなきゃいけないことなんだから。

「え……。ぜ、全部ですか……？ 織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を求める山田先生だが、無論誰もあげるわけがない。

俺はともかく、このぶ厚い参考書は事前学習するべきものなので本当にみんなが理解している。
女の脳内ってすごいんだな。

「おーい、桜。正直に手を挙げような」

その発言で一夏に向かっていた視線が一気にこっちへ来た。
セシリアはさっきから俺の事ずっと睨んでたけど。

「あ、秋山くんもわからないんですか？」

「いや、わかりますよ？ わからないわけじゃないですか、ハハハ……」

肩をすくめて態とらしく笑って見せる。

しかしこれが間違いだったらしい。

俺最近間違えばっかやってるような……。

「では教科書238ページ」

「わかりません！」

流石に千冬さんには嘘はつけなかった。

あの人はあれだ。人間であるから人の思考がわかるんだよ。
いっそ本当の悪魔だったらよかったのに。

「くくく……」

おいこら、わらってんじゃねえよ一夏。

パンパンッ！

痛い。

なんというか、鞭打されたように痛いのだが。
あの人は出席簿を鞭に変える特殊技能を持っているのだろうか。

「……織斑、秋山。入学前に参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

あいつが正直に答えたし、俺も答えるか、正直に。

「ハローワーク？俺には必要ないじゃん。って感じで捨てました」

パンパンッ！

俺と一夏の席そこそこ遠いんだけど、どうやったらそんなに早く叩けるんですか。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者共」

間違えて捨てたんだ。仕方ないだろ。

いや、故意だけど。

「あとで再発行してやるから一週間以内に憶えろ、いいな？」

「い、一週間以内であの量はちょっと……」

一週間あれば憶えられないこともないか。

「理解しなくても憶えればいいんですよね？」

「ああ、そうだ」

「わかりました。それなら簡単です」

記憶力が良いというか、単に憶えることが得意と言っただけだ。

元文系のせいもあってか、理解せずとも憶えるだけでいい様な教科ばっかりだったしな。

数学の定義も憶えるだけ。流石に定理は必死に理解しようとしてある程度理解したが。

「簡単!？」

「だそうだ。貴様も憶えろ。いいな？」

「……やります。やらせていただきます」

悪いな、一夏。

俺はこの人に怒られるのは基本的に避けたいんだよ。

「ISはその機動性・攻撃力・制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。

そういつた『兵器』を深く知らずに扱えばかならず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。秋山の言う通り理解出来なくとも憶える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

相変わらず硬い考えだな。

もつと柔らかく おっと、あの人には読心術があるんだった。

迂闊に変なこと考えれば必ず読みとってくるからな。ホントに末恐ろしい。

そんなこんなで2時限目が過ぎて行つた。

青春日記2日目 喧嘩

「ちょっと、よろしくて？」

2時限目の終わった休み時間、やはりというかセシリアが話し掛けて来た。

腰に手を当て、目を吊り上げ、俺を見下す様に見てくる。

女尊男卑の世界で女子が優遇されている、そんな世界を象徴するかのようないかにも今の女子らしい態度。

正直これにはうんざりする。

「よろしくなくて」

俺は適当に答えて何が書いてあるか意味不明な教科書をパラパラと開く。

参考書貰えるまで教科書でも見て勉強しようと思って　というつもりは一切ないが、気を紛らわす方法がそれしかないのだ。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話し掛けられているだけで光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら」

ああ、めんどくさいな。

それ相応の態度ってなんだよ。

召使みたいに跪けってか？

いくらお嬢様ではそのようなことは出来ませぬぞ。

「あー、はいはい。とてもとても光栄でした。わたくしのような下

々の民にお声を掛けて下さり光栄でございますよ。嬉しさのあまり乱心してしまいそうです。」

セシリアの目を見ずに棒読みで答えてやる。

煽るのは好きじゃないけど、このままじゃネチネチ言われそうだし、仕方ないだろ。

「……馬鹿にしていますの？わたくしがだれかご存じなくて？」

「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生。IS学園1年1組在籍。IS適正はA+。専用機持ちで名前はブルー・ティアーズ。因みにスリーサイズは上から」

「も、もういいですわ！ご存知なら自分の対応が無礼とは思いませんこと？」

スリーサイズなんか知るわけないが、そう言うておけば必ず止めてくるだろうと思つての発言。

いやぁ、よかった。

目測だけで適当なこと言ったらどんなことになってたやら。

「さぁ？エリートなんだな、くらいしか」

「そう！エリートなのですわ！」

俺がペラペラとセシリアが知らないと思つていたことを言つたためぐぬぬと齒を食いしばっていたが、エリートという単語に反応して食い付いて来た。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に

入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、あつちの男共々期待はずれでしたわ」

自分の理想を押しつけられてもな。

それと一夏の聞こえないところで悪口言うんじゃないよ。

陰口だけは嫌いなんだ。代表候補生なら堂々としろよ。

せっかく威風堂々がテーマソングにぴったりのイメージなんだし。

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたの様な人間にも優しくしてあげますわよ」

へえ、この態度が優しさか。

イギリスは随分と進んでるんだな。

「ISのことかわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。なにせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試ってあれだろ？あのISに乗って戦うヤツ」

「それ以外に入試などありませんわ」

「そうか。それは残念だったな。俺も一夏も教官なら倒したよ」

一夏は倒したというより突っ込んで来たのを避けただけ、俺は突っ込んできたタイミングに合わせて顔面パンチしたただけだけど。

あれはざらだろ。

男だからって舐め過ぎてるものがある。

「わ、わたくしただと聞きましたか？」

「女子だけじゃねエの？少なくとも男2人は教官を倒したからな」

そう言っただけで口を鰹みたいにパクパクし始める。

そういうアホみたいな顔の方がかわいから好きなんだけだな。

そして同時にガラスにひびが入った様な、ピシッという音が聞こえた。

っていうか今更だけど、なんで俺が原作の一夏役をやらなきゃいけないんだ。

あれか？やっぱ授業中に見つめたのがまずかったか。

「つ、つまりわたくしだけではないと？」

「ああ、そうだよ」

「あなた！あなたとあちらの方も教官を倒したっていうの！？」

「ああ、そうだよ。っていうか落ちつけ。さっきから同じ問答の繰り返しになってるから」

さっきから何度も言ってるじゃないか。

そんなに気にすることか？

女子で唯一なんだから誇らしいことだろ。

「こ、これが落ち着いて」

キンコーンカーンコーン

助かった。

流石のセシリアも規則には逆らえず、俺を睨みつけたまま席に座り、座ってもまだ睨んでくる。

俺嫌われ過ぎだろう……。

なんて思いながら刺さる視線にうんざりして、肩をすくめる。

そしたら隣からの視線は一層強くなり、本当に俺に穴が開くぞ。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

2時間目とは違い 1時間目は考え事をしていてわからないが

山田先生ではなく千冬さんが教壇に立っている。

えーっと、大事なことなんだろうか、その特性とやらは。

「ああ、その前に再来週行われるクラス代表選に出る代表者を決めないとな」

ああ、そんな行事あったな。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各種クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ということらしい。

いわゆるホームルーム委員みたいなものか。

対抗戦だけなら未だしも、なにかとめんどくさそうなことの多い仕事が多そうだから俺には関係ないな。

絶対に一夏をクラス代表にしてやるよ！

「はいっ！秋山くんを推薦します！」

ほあ、俺以外にも秋山ってヤツがクラスにいるのか。
そいつは御苦労なヤツだな。

「はいっ！私は織斑くんを推薦します！」

あいつがやるわけないとは思っけどな。

秋山はいても織斑なんて珍しい苗字は他にいないだろうし。

「私もそれが良いと思います！」

おお、これはいい感じだ。

「（このままいけば一夏か秋山さんがクラス代表だ！）」

「（このままいけば桜か織斑さんがクラス代表だ！）」

「では候補者は秋山桜と織斑一夏。他にはいないか？自推他推は問わないぞ」

なにか聞こえた様な気がしたが、互いに「頑張れよ！クラス代表！」
という意思を込めて笑顔で親指を上げる。

あれ？互いに？

いやいや、それはないはずだ。
はずだ……。

「「お、俺！？」」

思わず一夏とハモった。

いや、まだだ。これは推薦であり、本人が辞退すれば問題ない
と思ったが自推他推は問わないって言ってたな……。

くそっ、どうすれば……！
一夏が千冬さんに反論してるがあいつがああ鬼に口喧嘩で勝てるわけがない。

「待って下さい！納得がいきませんわ！」

おお！救世主！

俺にとつてはお前ほどの救世主はいないよ、セシリア。
恩に着るぜ。

さっき煽っておいて大正解だな。

「そのような選出は認められません！だいたい男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！わたくし、このセシリア・オルコットにそのような侮辱を1年間味わえと仰るのですか！？」

そうだそうだ、恥晒しも良いところだぜ。
もっと言ってやれ！

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然！それを物珍しいからという理由で極東の猿共になされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ」

島国って……イギリスも島国じゃねエか。
自分の墓穴は掘るなよ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべきそしてそれはわたくしですわ！だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなく

てはいけないこと自体、わたくしにとっては堪えがたいこと自体で
」

カチン

遠くにいる一夏からそんな音がした気がして、しかも自分の頭でも
そんな音がした。

不思議だ。冷静でいようと思ったのに。

日本が馬鹿にされるのは一向に構わないんだが、イギリスの方が優
れているというのは頂けない。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何
年覇者だよ」

「な……！？」

やっちまったって顔してるな、一夏。

大丈夫だ。あとは俺に任せとけ。

「しかもヨーロッパから国ごとにはぶられてるし、なんだよあのかっ
たい水。あんなの飲んでよく病気になるいよな。イギリス人全員
体の中鍾乳石だらけじゃねえの？秋芳洞かよ。人間が天然記念物だ
な、こりゃあ。しかも雨はしゅわしゅわしたヤツが降って来るし、
地下鉄なんて公衆便所みたいに汚いじゃねえか」

あ。

ここまで言うつもりはなかった。

流石に人間天然記念物は馬鹿にし過ぎた。

しかも秋芳洞なんて知らないか。

「あつ、あつ、あなたたち！わたくしの祖国を馬鹿にしますの！？」

おい、ここまで来てそれかよ。
先に国でも無くそこに住む人間を『猿』っていったのはどっちだよ。
俺も人の事は言えないが。

「決闘ですわ!」

また変な方向に話が転がった。
欧米方面は決闘が大好きなのか?

「ああ、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい。俺もそれでいい
だろ?」

クラスメイトと戦うつてのは気が引けるんだがなあ……。
わざと負ければそれでいいか。

「いいよ、それで」

「言っておきますけどわざと負けたらわたくしの小間使い　いえ、
奴隷にしますわよ?」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

俺はその真剣勝負で手を抜こうとしてたんだが。
待て。これは本当に不味い。勝手に話を進めるな。
全力でやった風に見せて負けるか?

可能ではあるが千冬さんが見てたら不可能だしなあ、困ったなあ。

「ハンデはどのくらいつける?」

まあ俺が本当に本気でやるわけにはいかないしな。
ハンデくらいあげないと。

「あら、早速お願いかしら」

どうやら俺の発言は勘違いされてしまったらしい。

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

俺は失言をしてミスったなと思っている隙に一夏がそのまま続けた。
確かにそう思ってたんだけど、女の方が強い世界だしな。
その発言を聞いてクラス中にどつと笑いが起こるが後の祭り。
飲もうと思えば飲めるが、吐いた唾は飲めないのだ。

「織斑さんと秋山くん、それ本気で言ってるつもり？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

まあそつだな。

でもここで証明すればいいんだろ？

ISに乗ることが出来れば男の方が強い、ってな。

「……じゃあハンデはいい」

しばらく考えた後、一夏はそう言った。
合った方がいいんだけどなあ。

そこら辺はこっちで調整しておくか。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを
つけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだ

なんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

とにかくこれで話はまとまった。

決闘は1週間後に第3アリーナで、クラス代表を決めるために1対1対1だ。

つまり俺とセシリアが組んで一夏を先に潰すことも出来れば、俺と一夏が手を組んでセシリアを潰すことも出来、一夏とセシリアが組んで俺を潰すことも可能というわけ。

まあ2人の性格からして誰とも組まずに真剣勝負、なんだろうと思うけど。

そう見せかけて2人で襲って来ても、まあ大丈夫でしょう。なんとかする。なる。

……はずだ……よな？

青春日記3日目 仲直りという名のフラゲ

放課後。

俺は家に帰ろうとカバンを手に持ち、セシリアの方を見る。

ここは全寮制なのだが、いかんせん女子寮で、まだ空気がないらしい。

だから空気が出来るまでの1週間は俺も一夏自宅通いつてわけ。

「なんですか？」

俺が考え事をしながら見つめていたらセシリアはぶすっとして答えた。

そんなにツンケンしなくても良いと思うが……俺の所為か。

「悪かったよ」

「な、なんですかの急に！謝られても手加減なんてしませんわよ！？」

「そんなこと考えてないって。ただお前の祖国を馬鹿にしたことを悪いなっと思ってたから謝っただけだ。手加減なんて望んでない。それじゃあまた明日な、セシリア」

クラスメイトだ。

変なことですつといがみ合ってもどっちにも得はないどころかクラスに迷惑を掛けるしな。

それに仲良くなっておいて損することなんてないし。

「あ
」

「ああ、まだ教室にいてくれたんですね、秋山くん」

セシリアが何か言おうとした気もするがまあいい。
放課後に山田先生がなんのようだ？

まさか本当に放課後に勉強会なんてしないよな？

「なんですか？」

「実は急遽寮が空いたんですよ。政府の方からなにか聞いてませんか？政府は織斑くんと秋山くんが珍しいから保護したいそうなんですけど……」

へえ、それは良い。

一夏の方は幼馴染さんと一緒に部屋になるけど、俺は如何なるんだろう。

個室が良いよな、個室が。

「さあ、ボクはなにも。一夏　織斑くんはどうなんですか？」

「織斑くんも秋山くんと同様な措置です。それにやっぱり何も聞いてないみたいで」

「それで、俺の部屋は何処に？あと荷物はどうなるんですか？」

「はい。これが鍵です。鍵に番号が書いてあるので見ればわかると思いますから。あつ、あとごめんね？秋山くんの家に勝手にあがって必要なモノだけ取って着させてもらったんだけど、やっぱりダメだったかな？ごめんね？」

人に謝られると良い気しないからすぐに謝るのやめてほしいわ。

てかどうやって入ったんだ？

1人暮しで鍵は常に持ち歩いている。

まさか玄関をぶっ壊して入ったとかはないよな。この人に限って。平穩を祈るぞ、我が家よ。

「いいですよ、別に。それで荷物は？」

「最小限のモノだけを持って来たんですが……やっぱり……その……」

なんだ？急にモジモジして。

別に下着見られたくらいで恥ずかしいと思うほど若くないぞ。

「エッチな本も持って来た方がよかったですか……？」

そんなことを耳打ちされた。

年上の女性が顔を紅くしてモジモジしながらエッチな本って……い
かん！別に先生にそんなつもりは毛頭ない筈だ！絶対に！

「あつはは……いや、いいですよ、あれは」

なんだこの公開処刑のような恥ずかしさは。

エロ本なんてみんな持つてる筈なんだが、流石に先生に見られるのは恥ずかしい。

「そ、そうですか……。ではこれはわたしが貰っておきますね」

「ちょっと待った！なに持ちだしてんすか！？」

危ないぞ、この人。

っていつか高校の教室にそんなもの持って入るなよ。

「あれ秋山くんの?」

「やっぱり興味あるんだあゝ」

「わたしたちもそういう風に見られてるのかな……」

『キヤー!』

ほら、なんか変な空気になるから。

それよりも背中に刺さるセシリアの視線が一番痛い。

「（ふんっ！少しは男らしいと思ったわたくしが馬鹿でしたわ！所詮はあのような低俗なモノを好む野蛮人なのよ！）
さようなら！」

視線でそんなことを語った後、不機嫌そうに教室から出て行った。

「あの……わたしなにか悪いことしたんでしょうか?」

セシリアにじゃなく、俺にな。

そもそも教室にエロ本を持っではいる時点でそれは悪と気付こうぜ、先生。

「いや、それ差しあげますんで」

「ええ!? いいんですか!? じゃなくて! わたしはそういうのには疎いというか、まだ経験がないので……」

聞いてないんだけどなあ。

それに生徒の前でそういうこと言つかな、普通。
女子同士なら未だしも俺は男だぞ。

「どうぞどうぞ。参考になれば幸いです。じゃあ俺はこれで」

教室の女子からなにやら変な目で見られながら、俺は教室を後にした。

俺は何もしてないのになんでこんな仕打ちを受けないといけないんだよ！

……はあ。食堂で飯食った後部屋に行つて寝よう。

「このぶ厚い参考書を覚えるんだよな……」

よく考えてみればこの量だもんな。

食堂で千冬さんからもらったのはいいけど、少し前より厚くなつて
るような気がするけど気のせいだと信じたい。

「（ここか……。個室だよな？な？）」

誰かと同室なんてことだけは絶対に避けたい。
というより女子高生と同室とか眠れないだろ。

ガチャッ

四の五の考えていても仕方がない。

もう何も考えずに部屋に入ってこの参考書を憶えよう。

「おお！ふかふかじゃねエか！」

その前にベッドヘダイブ。

これは確実に高級な羽毛を使用してるな、間違いない。
隣にもう1つベッドがあり、高級感漂う天蓋付きだが気にしないで
おこつ。

それにしても部屋の中がなんかイギリスっぽいなあ……。

「さあて、勉強勉強！」

そう思つて参考書を開いて、50ページほど憶えたところだった。
時間にすれば10分あたりだろうか。

部屋の中の何処かのドアが開いた。

いや、まさかそんな展開

「そういえば先生が今日から部屋と一緒にする人がいると言つてい
ましたわね。私の名前はセシリア・オルコット。どうぞよろし」

固まつた。

俺も、バスタオル1枚で出て来たセシリアも。

頭わになつた白くむつちりとした太ももにつうつと流れる水滴が
つてこんなこと考えてちゃダメだ！

「な、なぜあなたがこんなところにいまして？」

引き變つた顔のままセシリアが聞いて来る。

いや、まさかとは思つたがセシリアと同室とはな。
はて、これはどうしたものか。

「お、おう。実は今日からここで過ごさせて先生に言われて……ほら、鍵もある」

やばい。

こうバスタオル一枚のセシリアを生で見るとホントに綺麗だ。肌が白いだけでかなり魅力的に感じる。

だから思わずつい凝視しちゃうわけで……。

「そ、そうですか…… ってええ！？それは本当ですよ！？」

バスタオル一枚のままセシリアはずいっと詰め寄って来る。ちよっとそれは危ないぞ？

「あ、ああ、そうらしい……」

「……？なにかわたくしの体についてますの？」

「いや、綺麗だなと思って……」

「~~~~~ッ！！どこを見ているんですか！変態！猿！」

セシリアは顔を真っ赤にして近くにあったテニスラケットを手にする。

男ならそういうところに目がいくだろ、普通。情景反射的なモノなんだよ。

「出て行きなさい！」

「うおっ！タンマ！ちよっとタンマ！」

「問答無用ですわ!」

いや、俺の体がどうなろうとこの際問題ない。

しかし女の子が今日初めて逢った男子のクラスメイトに裸を見られるというのはどうだ?

俺には耐えられない。

見たいけど見たらセシリアとは一生口が聞けそうにないから見たくない。

何故俺がこんなことを心配しているかと言うとセシリアは何度も言っただけ通りバスタオル1枚だ。

そんな状態でバスタオルを振り回せば

パサッ

「ヒッ……!!」

「あぶねえ!」

セシリアが降りかぶった瞬間、バスタオルがはだけそうになる。

俺が目をつむればいいのだが、そうしたら打撃が来なかった安堵で目を開いてしまいそうだから俺は走った。

玄関へではなく、セシリアの背後へ。

はだけそうになるバスタオルをキャッチして、後ろでしっかり止めてやる。

「ふう、間一髪だったぜ……」

俺は油汗を拭いながら一息吐く。

「ひゃあんツ……!!」

その漏らした息があたったのか、セシリアは妙になまめかしい声を出した。

「わ、悪い!」

「い、いえ……。それより着替えたいので出て行って下さいます?」

「なんで?」

「なんでって、あなたは女子に目の前で着替えさせるのですか!?!」

「いや、セシリアが脱衣所に行けばいい話だろ?」

「そ、そうでしたわ……」

何を思っただけで部屋の中で着替えると言いだしたのか。

わからんが、セシリアも脱衣所に行き、とりあえずこれで一旦落ち付ける。

「あつ!」

なんだよ、次から次へと。

「どうかしたか?」

「い、いえ、なんでもないですわ……」

（言えない! 下着をタンスにしまったままなんて言えない! でもどうしたら……。まさか取って頂く訳にもいきませんし……。ええい!

ままよ！どうにでもなりなさい！」

なにか小言が聞こえた気がしたが、本人が大丈夫というのなら問題ないのだろう。

さて、しかしこれからどうしたものかな。

少なくとも1週間はこの部屋で一緒に暮さなければならないのだ。今日みたいなことがないように色々決めておかねばならない。

「あ、あの……」

「ん？」

モジモジしながらセシリアが出て来た。

無論服は着ている。ネグリジェだが。

色は白で、清楚な感じが出ているが、肌と同色に近いのでどこかエロイ。

「お、おやすみなさい！」

「ちょっと待て！これから一緒に生活するんだから生活時間のことに関して話さないといけないだろ？」

「だ、大丈夫ですわ！そんなことはどうでもいいですからわたくしにあまり近寄らないでください！」

あれ？俺そんなに嫌われることした？なんか涙出てきそうなんだけど……。

近寄るなどまで言わなくても良いじゃん、ねえ？

俺は結構傷つくよ？赤ちゃんの肌くらいナイーブだから。

いや、それはどうでもいいか。

「今日みたいなこと毎日やりたくないだろ？俺だって毎日こんなことやってたら疲れるし、セシリアの裸を見たくないから」

最後の一文が余計だったらしい。

その一言がセシリアという名の弾丸を放つ拳銃の引き金を引いてしまった。

「そんなにわたくしの裸を見たくないのですか！？やはりイギリス人など汚らしいと思っっているのですね！最低ですわ！わたくしなんて今恥を凌いではだ　　く　く　く　く　く　ッ！！」

なんか急にぼつと音を出して顔を真っ赤にされた。

はだ？肌がどうかしたのか？

「なにか勘違いしてるかもしれないから言っとくけど、正直言うと俺はお前の裸を見たい。別に恐いもの見たさとかではないぞ？普通に男としてだ。でもそれはダメだろ、人として、クラスメイトとして。だからそういう事故がないようにしっかり決めないとお前の為にも俺の為にもならない。そうだろ？それに謝ったじゃねエか。お前の祖国を悪く言った事は。あれはホントに悪いと思ってたんだからな？　　つ　たく　……」

俺は何を口走っているんだろう。

クラスメイトに「お前の裸を見たい」なんて言うヤツは前代未聞だぞ。

しかも合って初日、大喧嘩を繰り広げた相手に。

「（は、裸を見たいだなんてこの人はなにを仰ってますの！？）ま、まあそうですね……」

何故か　　というか裸を見たいと言ったのが原因か　　さつきより顔を紅くしたセシリアも納得してモジモジしながらちょこんとベツドの上に座る。

なんでさつきからモジモジしてるんだよ。

トイレなら行けばいいのに。流石にそんなことは言わないが。

「で、決めるべきは風呂の時間だよな。俺は早い方が良いんだけど」

「わたくしも早い方が良いですね。部活の後に汗を掻いたままというのも嫌ですし」

早い方がよいというか、女子が使った後に入ると色々気になるだろ。

「部活って……テニス部に入るのか？やっぱ上手いの？」

「当たり前ですわ！わたくしに出来ないことなどありませんの」

確か料理が苦手だった様な……気のせいだったっけな。

いや、気のせいじゃないような……ああ、全然思い出せねエ。

そりゃあ15年も経てばわからんよな。

「へえ」。入部したら見に行つていいか？」

「え？」

「だから部活見に行つていいかつて聞いてんだよ。テニスに興味あるわけじゃないけど、放課後1人で何もしないでセシリア待つてるよりマシだろ？それにお前も『もし俺が勝手に部屋を漁ったら』と思うと目に見えるところにいた方がよいと思つてさ」

「（わ、わたくしを待つ？もしかしてずっとこの部屋にいるつもり
ですの？そ、それって……！）
……漁るんですか？」

少し頬を赤らめながらもジトつとした目でこっちを見てくる。
器用なヤツだな。

「例えだろ？人のモノ漁るほど悪趣味じゃねエよ。で、行っている
のか？」

ていうか随分打ち解けたな。

今日初めて会って、詰り合って、同じ部屋になって、一騒動あって、
普通に目を見て話している。

まあセシリアは目を合わせたら即座に逸らすが、人と話す時は目を
見て話せておる聞けって言われなかったのか。
とにかくすごい急展開だ。

「ま、まあ？そんなに見たいというのなら見に来てもよくってよ？」

「プッ……」

「な、なにがおかしいんですの！？」

「いや……くくくつ。お前結構いいヤツだなんて思って」

そんな急展開がおかしくて自然と笑みが零れて来た。

まあ最初からわかったことだけど、流石にあって最初のやり取り
で心配になってたからな。

「わたくしもですわ。最初は頭に血が登って熱くなってしまいました。だが、こうやってゆっくり話してみるとときさくな良い人ですね」

「いやあ、最初は俺もあんまり関わりたくないなあ、とか思ってたし」

「ですがあなたはその事について　　というか喧嘩したことについて謝ってくれましたし、その……わ、わたくしも悪かったですわ。日本を馬鹿にして」

「くくつ……」

「いい加減笑うのはよしてくれそうです？」

そんなに呆れた様な表情しないでくれ、哀しくなるから。

「いや、ホントに良いヤツだな。好きだよ、お前のこと」

「な！？す、す、す……！」

ああ、言葉の選出ミスったかな？

俺が言ったのはloveじゃなくてlikeの方なんだが、男からそんなこと言われればそう取るよな。

あーあ、後の祭りだ。

「そ、そんな今日あったばかりで、す、す、好きなどと……！」

そんな風に動揺されたら俺まで動揺してくるって。

「……寝ようぜ」

「ね、ね、ね、寝る……！？」

（それってあれですわよね！？こんなことやあんなことを……この方と……！）「」

ごめん。

俺言葉のチョイス下手だわ。
ますます動揺させちまった。

落ち着いて明日話そうっていう意味で言っただがなあ、やっぱりそうなるよなあ。

「はあ……」

俺は立ち上がり、セシリアのベッドへと歩み寄る。

こうなったら仕方ない。

もう後には戻れない……！

「ちょ、ちょっと待って下さい！わたくし、まだ心の準備が……！」

『まだ』？いや、言葉の綾か。

「大丈夫だって」

怯えるセシリアにも、俺自身にも言い聞かせる。

さて、心の準備は出来た。

いざ参る　　！

「……はひ？」

「おら、一回冷静になれ。あつていきなりそんなことするほど俺は

変態じゃない」

むにゅっと、もっちりしたセシリアのほったを掴んでやる。
ぶにゃあつと横に伸びたセシリアの顔はいつもとは違うゆるい表情でかわいらしい。

こうやってやると意識がこつちにいつて結構な人が落ち着くんだよ。
抵抗すれば痛いしな。

「は、はなひてふだひゃい（は、はなしてください）！」

「お前今変なこと考えてただろ？」

「……ひゃ、ひゃんのことひゅか？」

しらばつくれ様としても無駄だよ。

その証拠に顔を真っ赤にしてそっぽ向いてるじゃないか。

「ま、いいけどな。まさか？イギリスの代表候補生が？そんなことを考えてると思わなかったなあ。しかも極東の猿相手に」

冗談っぽくニヤツと笑ってやる。

そしたら悔しそうにまた顔を真っ赤にさせる。

こいつの表情豊かだけど、基本顔が赤いな。

「……お前さ、もうちょっと人並みの態度取れるだろ？ずっと気い張ってて疲れるだろ？ルームメイトにもそんなんじゃ持たないぞ？1週間だけだろうけどルームメイトなんだし、もっと馴れ馴れしくして来いよ。なんかあったら俺が守ってやるからさ。んじゃ、おやすみ」

風呂入ってないけど、明日入れば良いだろ。

兎に角寝たい。もう寝たい。

あんな恥ずかしいこと言っただけ起きてられるほど俺も無敵じゃないからな。

「（守るって……。なんですの？このこの辺りに突っかかる何かは……）」

セシリアの小言が聞こえた気がしたが、空耳だろうと思ってそのまま眠りについた。

青春日記3日目 仲直りという名のフリザ（後書き）

セシリアさんと同室の方は物語の都合上別の部屋へ移動しました

青春日記4日目 カオスルート

「はぁ……きもちー」

朝からシャワーを浴びれる贅沢。

貧乏だったから中学時代はそんなこと出来なかったが、国立万歳だな。

昨日は油汗掻きまくって寝たから本当に気持ち悪かったんだ。

いや、正確には寝られなかったんだけどな。

隣のセシリアも寝られなかったみたいだし、仕方ないか。

「~~~~」

鼻唄を唄いながらパンツ一枚と頭にタオルを乗せて脱衣所から出る。流石に朝早いこの時間にセシリアは起きてな

「あ、あ、あ……！！」

そつえば寝てないから起きてるよなあ。

俺はみられても平気だが、見る方は辛いだろうな。

187cmに78kgという、結構鍛えてある方だと思っから恥ずかしい理由がない。

「ああ、ごめん。まさか起きてるとは思わなかったから」

嘘です。知ってました。失念していただけです。

動揺するセシリアを軽くスルー気味に横をすり抜け、自分の制服を着る。

「（なんてたくましいお体……。惚れ惚れしてしまいますわ）」

ぞぞぞっ！

なんだ？背筋に妙な寒気が……。きのせ

「ヒッ！？な、なにやってんだよ！？」

いきなり背中を指でなぞるとか聞いてないぞ！？

俺なんかフラグ的なモノ立てたか？

昨日か？昨日の一言か？あんなものでいいのか？わからねえよ！

「す、すいません！わたくし、こんなに近くで男性の体を見るのは初めてで……。なんというか……。興奮しますわ」

興奮すんな！

朝からそんな気分になれるほど俺は若くないし、なれてもなんか無理だ。

というかなんでこうなるんだ。

「あゝ、いや、くすぐったいんだけど……。やめてくれるか？」

「あつ、はい……。あの、榎さん？」

榎さん？

なんだその呼び方。

昨日まで『あなた』だったじゃないか。

いや、あなたの方がなんか近い関係みたいに聞こえないこともないが。

「な、なんでしょう？」

「よろしければ朝食にご一緒しても構いませんか？」

それくらいなら許可を得なくてもいいのに。

まあこいつって友達作るの苦手だろうからな、性格的に。

「いいぜ。っていうかさ、昨日は緊張して全然寝れなかったんだよ。セシリアは寝れたか？」

「わたくしも椀さんと同じですわ」

「そ、そう……」

「はい！」

妙に同じを強調してきて、ほっぺをつつすらと赤らめる。

話が弾まない！なぜだ？昨日はあんなに弾んだのに。

しかもあれだ。この場に流れる空気。甘い。甘過ぎる。

この部屋はお菓子の家ですかってくらい甘い。

衛宮士郎の理想かってくらい甘い。

もつと言えば少女漫画のハッピーエンド並みに甘い。

兎に角甘ったるい。ダメだ、耐えられん。

「じゃ、じゃあ待ってるから着替えて来いよ」

「あの、椀さん？」

「なに？」

「目を瞑っていてくれますか？」

「はいiiiiiiii!？」

おい、今なんて言った？

聞き間違いではないんだよな。

それってあれか？ここで着替えるパターンか！？

「誤解しないでくださる？あまり下着を見られたくないなので目を閉じてくださいと言っているのです」

ああ、そういうことか。

そうなら早く言ってくればいいのに。

……待て。下着……だと？

つまり今は いやいや、寝る時にブラはつけないからブラだ。ブラを取るんだよ。

そうだ。ノーパンなんて絶対ない。絶対にだ！

「えつと……これと……これ」

『これ』と『これ』？

あれー？おかしいなー？

ブラを2枚重ねでつけるのが流行っているのかな？

男だからわからないや、ハハハ。

そんなことを思いながらチラッとだけ見てみた。チラツとな。ばれない様に。

そもそもこの歳になってつけていない時の女子の下着を見たって何の感情もわかないって。

「ぶふっ！」

思わず噴いた。

別にセシリアの下着が悪趣味というわけではない。

ただあれだ。ブラじゃない方の下着も手に取ってから思わず噴いた。つてことは昨日からすつとか？

だからモジモジしていたのか。なんか納得。

「み、見ましたの！？そんなにわたくしに興味があるんですか？いや、もしかし今は朝。この続きはまた夜にゆつくりと」

続きってなんだよ！

1人で脳内妄想展開しはじめんな！

俺は何もする気はないぞ！

「……俺外いるわ」

部屋の外に出てはあ、と一つ溜め息を落とす。

ダメだ。あっちのペースに合わせてたら身が持たない。

常に俺のペースで会話を進めよう。

たぶんセシリアのフラグが立ったから前に比べて大人しめになったし、十分可能はずだ。

「あれ？栞じゃないか。どうしたんだ？こんなところで」

「お前こそ。幼馴染との愛の巣に戻らないのか？」

こいつは追い出されたのか？

昨日の夜なんか騒いでたみたいだし、可能性としては有り得る。

「愛の巣って……。あそこを愛の巣と言うなら地球上すべてが愛の

巢だ」

そこまでひどいのか。

まあ厳しい性格してるからな。

「それでお前はどうしたんだよ？」

「状況としてはお前と似てるかな。俺も女子と同居中だ」

「マジか！？それって誰！？」

人のことになると途端に元気になるな。

「聞きたいか？すげえぞ？」

「……そんなにか？」

「ああ、たぶん一番驚く」

「一番？ってことはまさか　！」

「さあ栞さん！行きましようか」

一夏の言葉を遮って中から元気よくセシリアが出てくる。

セシリアは一夏に一瞥くれるが、興味なさそうに俺の腕に絡んで引っ張り始めた。

もっと交友的にしろよ。

「そついうことだ。事情はあとで話す」

「あ、ああ……。」

（一体一夜の内になにがあっただ？あのセシリアが椀にべったりだなんて）」

「あんまくつつくなって」

「良いではありませんの。ルームメイトなんですから」

理屈になってない。

こんな理不尽がまかり通る世界は不思議である。

「あれ？あの2人昨日喧嘩してなかったっけ？」

「なんか同じ部屋になったらしいよ」

「ええ！？ってことは昨日の夜に急展開が　！」

はあ……セシリアと一緒にいるだけでこれだ。

昨日喧嘩したから仕方ないのかもしれないが、なんとというか、目立ちたくないな。

男ってだけで十分目立ってるが、そこは気にしたら負けだ。

「飯食べる時くらいもうちょっと離れてくれないか？」

こう……当たるんだよ、右肘がなにかに。何かとは言わないが。いや、あえていうとおっぱいに。

「はい、あ〜ん」

そんなことはお構いなしにご飯を俺に食べさせようとするセシリア。正直公衆の面前でも面前でなくても厭しいものがある。

「うわぁああああ！」

「あぁん！お待ちになつて！」

誰が待つか、アホ！

俺にはそんな羞恥プレイを我慢できるほどの忍耐力は無いって！だからあまりの恥ずかしさに逃げた。

人としてこれが当然の判断だ。

なにもおかしいことはない。

「おお！いいところに！」

走つて行つた先には一夏とその幼馴染。

なんで寮の方に走つたかは俺もわからんが、兎に角助かった。

「桜！？」

「な、なんだ！」

あれ？止まらないぞ？

どうしたものかな。

無論考えたところでどうすることも出来ず、一夏と幼馴染の間を突っ切りそうになった。

「（私と一夏の仲を裂こうと言うのか？いい度胸ではないか！返り討ちにしてくれる！）」

なにか一夏の幼馴染さんの心の声が聞こえた気がしたが、時既に遅し。

「ぐへっ！」

どこからでたのかわからない声を出して、俺は合気道の様なもので見事に空中で一回転させられ、顔面から地面に無事に着地した。

無事……じゃないか。

しかし自分でも綺麗に投げ飛ばされたと思うわ。
実に見事だな。

「ちよつと篠ノ之さんでしたかしら！あなた！栞さんになにしてくれますの！？」

追い掛けて来たセシリアも追いつき、息を荒げながら一夏の幼馴染
篠ノ之^{しののけ} 箒^{はう}に喧嘩^{けんか}を売った。

「ふん！こいつが私と一夏の仲を裂こうとしたから返り討ちにしてやったまでだ。文句があるのか？」

「大ありですわ！あの勇ましい栞さんの顔に傷でもつけてなさい！許しませんことよ！？」

「こいつが勇ましい？些か滑稽だな。今自分の目の前で投げ飛ばされたではないか」

「あなたの隣にいるへなちょこ男子よりはマシですわ！」

「貴様！一夏を愚弄する気が！」

「あなたこそ椀さんを馬鹿にしないでくれます？そっちのへなちょこより断然男らしくてお強いですわよ？」

「私は一夏の幼馴染だが一夏はこんな簡単に投げ飛ばされたりはしない！」

「まさか生身の女子に日本男児である椀さんがあなた相手に本気を出すとでも？今は女尊男卑の世界。あなたは椀さんに氣遣われたこともわかりませんか？」

よくもこうポンポンと悪口　いや、いいところなのか？　が出てくるものだ。

「なあ一夏。こいつら放っておいて飯食おうぜ。見た感じ篠ノ之はお前に対して不機嫌な感じではないし」

「そうだな。腹減ったしな」

よし、このままゆつくりと　。

「何処に行くつもりだ、秋山 椀」

「逃げるんですの？へなちょこさん」

喧嘩なら勝手に2人でやってろよ。

こっちは寝不足でなにかと辛いんだよ。

「決闘ですわ！」

「いいだろう！受けてやる！」

「こちらの代表は椛さんということで」

「無論、こっちの代表は一夏だ」

あれ？話に変な方向に進み始めたぞ？

代表ツてなに？チームなのか？

しかも戦うのが俺と一夏って……。

「ちょ、ちょっと待てよ！なんでそうなるんだ！？決闘なら2人でやってくれよ。俺と椛は無関係だろ」

いいぞ、一夏。

もっと反論してやれ！

「いえ、関係ありますわ。これはお互いが信じる者同士、どちらが強いか決める決闘ですの。ならばお二方が争うのは道理ではなくって？」

そんな道理があるなら今直ぐぶっ壊してやるよ。

まずはその道理をぶち殺す！

……いや、語呂が合わなかった。聞かなかったことにしてくれと有り難い。

「こればかりはこいつの言う通りだ。一夏、今日から私が稽古をつけてやる、いいな！？」

「わたくしも桜さんに教えて差し上げますわ、ISのことを一から手取り足取り……腰」

「取らなくて良いから！」

流れがカオス過ぎて意味がわからん。

つまりあれか？

来週に行われるクラス代表決定戦はセシリアが辞退して俺と一夏のタイムマンになるのか？

「行くぞ！一夏！」

「お、おう。でも教えてくれないんじゃないかなかったのか？」

「うるさい！教えてやると言ったら教えてやる！黙ってついて来い！」

相変わらず厳しい嫁だな。

でもこれでようやく静かになったから万事かいけ

「桜さん！今日の放課後から秘密の特訓ですわよ！」

解決はしてなかったな。

妙に秘密を強調してセシリアは腕に抱きついてきた。

「（はあ……。前途多難だな……）」

青春日記5日目 修羅場に国境はないようです

「ええ！？クラス代表決定戦からセシリアさんが降りた！？」

「うん。なんかセシリアさんと秋山くんが同じ部屋になってからなんか和解したらしいよ」

「それってつまりあれね？あれよね！？秋山くんと織斑くんのあれが見られるのよね！？どっちが攻めでどっちが受けかしら……。ああん！」

「で、どっちが勝つと思う？」

「うん、正直どっちが勝っても同じかなあ」

「でも攻めは秋山くんだから勝つのは秋山くんじゃないかしら？」

「そう？私的には織斑くんが攻めでも」

『ああ！良い！』

教室に着いてからずっとこんな感じでクラス代表決定戦の話が持ちきりだ。

ところどころで出てくるヤツはダメだ。腐ってやがる。早過ぎたんだ。

「コラ！休み時間は終わりだ！さっさと散れ」

そんなバタバタした中千冬さんが入って来て、みんなは即座に席につく。

この人の統率力すごいな。

「ところでセシリア。クラス代表決定戦に辞退すると聞いたが何故だ」

「はい。わたくしの想いはすべてこちらの秋山くんに託しましたので」

いや、託されても。

俺はそんな想い背負って一夏と争うつもりはないぞ。

ギロリ

しかも俺が千冬さんから睨まれた。なぜ？

この人の場合は見ることに睨むことであり、睨むことは食うことである。

だから普通に見ているつもりなのだろうが、奈何せん目つきが鋭過ぎる。

「ところで織斑、お前のISだが準備に時間が掛かる」

睨んでおいてスルーですか。

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ。それと秋山、貴様にも専用機がある。そっちは政府で用意した

ため既に学園に届いている」

一夏はお前で俺は貴様。

ここに差別を感じるのは俺だけか？

「先生！でもそれだと秋山くんが少し有利じゃないですか？ISは稼働時間が物を言うんですよね？」

確かに平等ではない気がする。

「問題ない。飽く迄その日時にないだけだ。訓練程度ならそのらの訓練機でも出来よう」

まあ名前の通り訓練機だもんな。

それで訓練が出来ないとなるとそれはおつむのほうに問題があるわけ。

と、そんなこんなの中に時間はポポポポーンとACの様に過ぎて行き、放課後。

どうやらセシリアは部活まで休んで一緒に訓練をしてくれるらしい。優しい良い子じゃないか。でもな

「秋山、ついて来い。1人でだ」

ということではらくお預け。

今から俺のISのあるところへ連れて行ってくれるらしいのだが、何故1人なのかは知らん。

一夏の時は第さんも山田先生もいたのに。

「実はな、貴様のISは出所が不詳らしい」

格納庫へ着くなり、いきなりそんなことを話し始めた。
でもさつき政府が用意したって言ってた様な……。

「政府が用意した、ということにはなっているが実際は不詳だ。どこから湧いて出たのかもわからん」

ああ、それならわかりそうな気がする。

たぶんあのベビーエルフ2人が何かしらで用意してくれたんだろう。

「なにがあるかわからん。が、乗るか？」

そんな質問は野暮だろう。

「乗りますよ。で、実物は？」

「これだ」

ガラガラ……

閉まっていたシャッターが開き、俺の専用機の姿が顕わになる。

見事なまでの再現。

まるでそこにアーチャーが跪いてるかのようにな　あいつが跪く筈

がないが　主を待つように佇んでいる。

まるでこうなることを待っていたかのように。　実際15年待ってたんだけど。

機体のカラーは黒と赤。脚部・腕部・胴体装甲等、すべてが黒なのだが、彼を象徴する赤い外套の赤原礼装までしっかりと再現している。

しかしやはりIS。

甲冑とは違い、機械特有のごつごつした感じが否めなくもないが、

かなりの出来だろう。
結構スマートだし。

「機体名は『英^{サーヴァント}霊』。貴様とはほど遠いところにあるな」

それは名誉棄損ですよ？法に触れてますよね？

いくら教師でも言っていることと悪いことがあると思うの。

まあそんなことは軽くスルーし、英霊に触れる。

こいつの全てが俺にわかる。そんな気がした。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

千冬さんの言葉通り装甲を開いている英霊に身を任せる。

受け止める様な感覚がして、すぐに俺の体に合わせて装甲が閉じた。

「（おお……これはすごい）」

初めてISを動かした時とは全く違う感覚。

まるで自分の体だ。

産まれたときからずっとこの状態の様な一体感。

解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が視界を中心に広がって全身にいきわたる。

ほお、見えないところまで見えるってこんな感覚なんだな。果てしなく気持ちいいぞ、これは。

「秋山、気分は悪くないか？」

「ええ、全然。むしろいい感じです。少し試運転して来ていいですか？」

「ああ、行つて来い」

取り敢えず出来ることを確認しないとな。
飛ぶのは問題ない。イメージ通りだ。

「（次は投影。ええっと、こんな感じで）」

意識を集中させた瞬間、両手に1本ずつ刀が握られていた。
黒と白。対となる夫婦剣の干将・莫耶。

やっぱりアーチャーと言えばこれなんだが、やっぱり何処か機械的だ。

消費エネルギー50。シールドエネルギー残量、4950

そしてシールドエネルギーの量がおかしい。桁が違う。

でも投影で自然と消費する仕組みだし、これくらいが妥当か。

干将・莫耶だつてランクはC。だからこれだけの消費で済むんだし、
ランクの高い宝具を投影すればどうなるかわからない。

1回で残量が0になる可能性もあるわけだ。

一応試しておきたいが、奈何せんなぜかギャラリーがいる。

見世物にする気はないのでこれ以上投影する気はない。

あとはフィッティングとフォーマツト。

ファースト・シフト

これを済ませて一時移行しなければ俺の専用機にはならない。

そこからは簡単。

やっぱりポポポポーンとACの様に済ませ、その日は終了ってな感じ。

「悪いな。今日は」

「いえ、よろしくてよ。仕方ありませんもの、先生の言うことでは折角部活まで休んでもらっていてこれに関しては本当に申し訳がない。」

「その代わり。わたくしのいうことを1つ聞くとするのはどうでしょう?」

「は?」

それはいろいろと嫌な予感がする。逃げたい。しかしそんな無礼は出来るわけがない。

「約束を破ったのですから、当然ですわ」

その通りです。

約束を破った俺が悪いんです。

例えばいくら大事な要件だからと言って、先にしていた約束をほっぽっていいわけがない。

故に自業自得。

これからは俺は如何なるんだ?

奴隷の様に足を舐めなければならぬのか。

「わたくしの背中を流してください」

時が止まった。

騒ぎを聞きつけて、というか俺とセシリアが同居していることがわかったため、抜け駆けがないようにと常に見張りがドアを少し開けて覗いているのだが、その人も言葉を失った。
無論俺も。

「いやいや！それは無理！背中って……それはダメだろ！」

『みんな〜！秋山くんがセシリアさんの背中を流すらしいよ〜！』

見張り役、余計なことを！

ていうか流さん！これは無理だ！

「え？え？本当？」

「どっちから切り出したの？」

「やっぱりもうそいう仲？」

ほら、それにギャラリーが大量に集まって来たし、俺には無理だ。そもそも女子の背中だぞ？しかも綺麗な白人のクラスメイト。俺の純情を弄ばないでほしいものだ。

「約束、でしたわよね？」

「うっ……」

それを言われると何も言えない。

いくら押し付け的に約束を取り付けられたからと言って、約束は約束。

破ればそれ相応の罰を受けるのは当然。

これはどうしたものかねえ。

あつ、気を紛らわすために説明するけどサーヴァントの待機形態は礼呪が描かれたロケット。色はやはり金。

ロケットって言うのはあれな。中に写真を入れられる首飾りのこと

な。

「ではお願いしますわ」

そう言つてセシリアは先に風呂場に入つて行つた。

腹なんて括れない。

同級生とお風呂？羨ましいと思つていたが羨ましくなんかねエよ！
入りたくねエよ！

俺は万感の思いを込めてギャラリーを見た。

『行つて来い（キリッ）』

『ここは敢えて裸で出てくるまで待て』

『わたしのところに来る？』

この3つの派があるらしい。

多いのはよくわからんが最後。

俺が行つてもいいことなんてまずないぞ。

しかしギャラリーは当てにならない。

どの選択肢も俺を迎えるのはバッドエンドだけだ。

ここにはないのか？誰もが笑つて過ごせる最高のハッピーエンドつてヤツが！

「なにをしていますの？早くいらして」

『おお……』

バスタオル1枚で出て来たセシリアを見て、感嘆の声が上がる。

俺は目のやり場に困りながらも太ももを凝視するだけなんですけど

ね。

「あ、あなたたちまだいましたの！？見世物じゃありませんのよ！」
セシリアの一喝により、もともと何の希望もないギャラリー共が散らされた。

「さあ、桜さん。はや」

p r r r r

「あつ、悪い、電話だ」

ナイスタイミング！

こんなときに電話掛けて来てくれるなんてきつと良いヤツだ。

「（国際電話……？）」

はて、海外の人間が俺に救済の手を差し伸べてくれるのだろうか？
取り敢えず出てみた。

「もしもし？どちらさま」

「もしもし、桜？ボク今度IS学園に行く事になったんだ！また逢えるね！楽しみにしてるよ！わくわくするな、桜に会っの」

とんだ茶番だ。

救世主でも救いの手でも何でもない。
悪魔が魔の手を差し伸べてきやがった。

「ああ、久し振りだな。よく俺の電話番号憶えてたな」

「当り前だよ！ずっと忘れないって言っただろ？」

なんか俺の知ってるそいつとは少し喋り方が違うな。

何と言うか、男っぽく喋る様になった。

「そっか。じゃあな、俺は用事があるから」

ここでセシリアに女と電話していることがばれたらなにかまずい気がする。

そつ、なにかが。正確にはわからないが、とにかく何かが。

「え！？もうちょっと話そつよ！久し振りなんだし！」

「久し振りって言ってもお前がずっと電話して来なかったんだろ？最後に会ったのは小6の時、最後に電話したのは1年前だ」

小学校の頃、俺は世界各国を渡り歩いていた。

親の仕事の関係上でな。

中学になって亡くなったから定住で1人暮したが、それまでは色々な国を見て来た。

そこで出逢った内の1人がこいつ。フランスにてあった、シャルロット・デュノアという女性。

「桜さん？まだ終わりませんか？」

肌についていた水滴が乾き、寒いのかプルプルと震えながらこつちを見てくる。

寒いなら風呂に入ってるよ。

「あれ？今の声だれ？もしかして椛、今女の子と一緒にいる！？」

よく音声を拾う電話なこと。

そんな無駄な機能発達させるなよ。

「今の声……もしかして電話相手は女性ですよ！？」

「いや……」

「椛！どうなの！？」

「そうですのね！？」

こいつら恐いわ！

ピッ

取り敢えずシャルには悪いと思ったが切らせてもらった。

「ほ、ほら。もう終わった」

p r r r r r

またか！

しつこいと嫌うぞ！

「まだなにか用事か！？こっちは少し立てこんでんだ！」

「……久し振りに電話を試してみればいきなり怒号を上げて、なにこ

とだ？」

あれ？シャルじゃない。

なら誰だ？またこんなタイミングよく電話をしてくれる人は、取り敢えずセシリアを手で抑えながら、よく声を聞いてみる。

「もしや忘れたとは言っまいな？」

ああ、わかるぞ。この喋り方、声。
忘れるわけがない。

「ラウラか、久し振りだな」

こっちはドイツであつたこれまた女の子。本名ラウラ＝ボーデヴィツヒ。

どうやら俺は欧米辺りでは女性に好かれるらしい。
日本人は全然だが。

「それで何か用か？」

「用がなければ電話を掛けてはいけないのか？」

いけないよ？

けどさ、時と場合、TPOを考えてくれ。

「ふん。もしかしてIS学園こうちに来たりするのか？」

「よくわかつたな。その通りだ。流石私の嫁だ」

シャルも同じだったしな。

でも嫁はないよ。

本人の意思とは無関係に勝手に女にされて、挙句結婚までさせられてたまるか！

「じゃあ俺は用事があるから、これでな」

「そんなに私と電話をするのがイヤか？」

「イヤなわけないだろ？ 久し振りに声聞いたんだ。嬉しいに決まってる」

「そうか。それは良かった。そう言えば聞いたぞ。椀、ISを操縦できるらしいな」

もしかして要件ってこれか？

シャルモラウラも俺がISを起動させたからお祝いの電話をしてくれたとか？

それなら申し訳ないことしちゃったな。
あとで掛け直すか。

「もしやまた女性ですの？」

「いや、ちが」

「椀、今女の声が聞こえたが……まさか」

「おいおい、そんなわけ」

「女性ですのね！？」

大きな声を出しちゃダメよセシリアちゃん！
電話してるんだから、めっ、って何回言えばわかるんだよ。

「……だれだ、今は」

もうやめてくれって。

これ以上俺の神経すり減ったら死ぬぞ？良いのか？

「だれですの！？電話のお相手は！」

言ってもわからないって。

というより言う必要もないだろ。

「よし、いい度胸だ。私との電話中に密会など……わかっているな？」

これはまずい。まずいぞ。

このままじゃあいつが日本に来た時なにされるかわからん。
しかしもう騙す手立てはない。

なにせセシリアが大声出しちゃったから。

「ああもう！ラウラ！すまん！こっちに來たら今度言うこと1つ聞いてやるから！じゃあな！」

ピッ！

よし、これでこっちは大丈夫だ、問題ない。

さて、あとはセシリアか。

よく考えてみれば、というかずつとバスタオル1枚でいて恥ずかしいのか？

「セシリアも、そのままじゃ風邪引くぞ。早く着替えて来い」

「でも」

「約束を破ったのは悪かった。でもな、それは違うだろ。その代わりと言っちゃなんだが……絶対に勝ってやるよ、代表決定戦」

「……はい！」

頭に手をぼんと起き、そのまま俺はベッドへダイブする。
最近朝に風呂に入ることが多くなったなあ。
ま、仕方ないか。

青春日記6日目 クラス代表決定戦

翌週の月曜、ついに一夏との対決の日がやってきた。

たとえ相手が一夏でも、クラス代表が掛かっているからと言っても、手を抜いて負けるわけにはいかない。

セシリアと約束しちまったからな。絶対勝つって。

くそう、恨むぜ1週間前の俺。

第3アリーナ、今日一夏のISが届いたらしく、俺はそこで戦闘待機中。

無論まだ何も投影していない。

ファースト・シフト

そうそう、言い忘れていたが一次移行してからなんかまた投影によるシールドエネルギーの消費がまた少なくなった。

「こうやって向かい合うってのも変な感じだな」

ピットから出て来た白式と一夏を見て、軽く笑い掛ける。

「ああ、そうだな。なんでこうなったか未だにわからん」

確かに。

もともとは俺とセシリアの喧嘩、そこに一夏が加わる。そして箒さんまで加わってセシリアと箒さんが降板。

俺と一夏に争う理由など特にない。

「まあでも、負けるわけにはいかないんだよな。約束しちまったから」

「ああ、俺もだ」

早く一夏の白式はファースト・シフト一次移行をしないのだろうか。
このままじゃ不利過ぎるだろう。

『いつまで雑談をするつもりだ！さっさと開始しろ！』

「チツ……しゃあねえな」

「そうだな。仕方ない」

せめてと思ったが、千冬さんが急かすので俺は戦闘態勢へと入る。
それを見て一夏も戦闘態勢に入って展開可能な武器一覧を開いて呼び出そうとするのだが

「へ？」

やはり素っ頓狂な声を出した。

一夏の白式、まだ初期設定だから近接ブレードしかないんだよな。
まあ一次移行したところでそれが雪片式型になるくらいの変化なのだが。

「どうした？」

「いや、なんというか……すまん。武器が近接ブレードしか無い」

「そうか。それは困った」

「いや、なんでそんなに棒読みなんだ？」

「俺にもわからん。でもそれがお前にとって一番使いなれてる武器じゃないのか？」

「……それもそうだな。んじゃ、遠慮なくいかせてもらうぜ！」

ギョーン、と一気に加速してくる白式。

無論人間の動体視力だけでどうこう出来るスピードではないのだが、ハイパーセンサーによりかなりゆっくりに感じられる。

「
トレース
投影、開始
」

干将・莫耶を投影し、一直線に向かってくる一夏を迎え撃つ。

ガキンッ！

激しい金属音と共に散る火花。

IS同士の戦闘ってこんなに白熱してるものなのか。

いや、セシリアと特訓はしたのだが、あいつは中距離射撃型だったから。

「（やっぱ剣道やってただけあるな。確かに強い。でも）」

こっちは宝具の担い手の経験まで獲得できるのだ。

武術でありスポーツである剣道と聖杯を争う真剣勝負の殺し合い。

剣道が真剣勝負じゃないとは言わないが、そこには埋めようもない溝がある。

常に死と緊迫した状況での経験が呼びさまされ、俺の感覚を更に鋭く研ぎ澄ませる。

キンキンキンキンッ……

少しずつ、しかし確実に。
相手のシールドエネルギーを削りながら攻め立てる。

「うわぁ……もう20分以上続いてるよ……！」

集中している筈なのに、ギャラリーの声まで拾ってくれるサーヴァント。

しかし以外だ。

もう20分経ったのか。

それならもうそろそろだな。

キンッ！

一度一夏から距離を取り、一息吐く。

大したダメージは与えていないにせよ、着実に刈り取って言ったから向こうのエネルギー残量はかなり少ない筈。

対してこっちは一度も攻撃を受けていないので消費したのは投影分のエネルギーだけ。

「んじゃ、これで決めるか」

「！？投げた！？」

その場にいた、セシリアと俺以外が驚愕に目を剥く。

1対の夫婦剣は一夏へとまさに高速で投擲された。

無論ホーミング機能など付いていないので、一夏はそれを余裕の表情で難なく躲す。

しかしそれが間違いだ。

騙すようだが、狡猾な狩猟者にそんなことは関係ない。

「
フロークンファンタズム
壊れた幻想
」

投擲した夫婦剣を爆発させた。

魔力 シールドエネルギーを込めれば込めるほど爆発の威力を増すそれは、否応なく壱夏を爆風の渦に巻き込んだ。
しかし、これで終わりじゃないだろうな。

俺もわかってるからこそやっただし。

「これは……」

煙が晴れ、一夏の姿が顕わになる。

しかし先程までとは白式の形態が異なり、さきほどよりも機械的な
ごつごつは取れている。

「ようやく一次移行したか。やっぱ対等じゃないとな、勝負は。調
子はどうだ、一夏」
ファースト・シフト

「ああ、最高に良い。しかしあれだ。俺は世界で最高の姉さんを持
ったよ」

「……そうか。でも負けないぜ？ 守るものがあるからな」

「俺もだ。俺は自分の家族を守る。とりあえずは、千冬姉の名前を
守るさ！」

俺も守らなきゃいけないよな。

まずはあいつとの約束を！

俺は再度干将・莫耶を投影し、投擲する。

「同じ手にはなんども引つ掛からないさ！」

しかしそれは一夏の持つ雪片式型により叩き落とされる。

まあ俺は懲りずに何度も何度も投げるわけだが、やっぱり全て叩き落とされる。

作戦が無く自棄になっているのではない。

まだ切った手札は氷山の一角。

切る札なんていくらでもある。頭の中に。

「（これで一夏は思い込む筈だ。投擲からの秒数・若しくは一定距離ではないと爆発は起こらないと）」

「（俺が叩き落とす前に爆発しないってことは距離か時間が関係してる可能性がある。それなら　！）」

案の定一夏は加速して来て、一気に俺へと迫る。

「（掛かった！）」

これで勝ちが確定だと思った。

しかし中学以来の付き合い、そうもいかなかった。

「
壊れた幻想
」

「ッ！？」

一夏の目の前で不意打ち的に爆発した夫婦剣。
しかし爆煙のなかに白式の反応は無い。

「わかってたぜ。そのくらい」

過去に付き合いがあるとこも思考を読まれてしまうものか。
いや、ハイパーセンサーによる俺の油断の感知か。
どちらにせよ追い込まれた事に変わりはない。

ニヤニヤしゃがって、勝ったとも思ってるのか？

「おおおおっ！」

上空からのエンジンによる加速に加え重力加速度による加速。
かなり速いスピードで白式は俺に突っ込んできた。
零落^{れいらく}白^{びやく}夜^やか。

「お前の考えも読めてたけどな」

ニヤリと口角を上げると、一夏はハイパーセンサーによる感知で自分の周囲に14の剣群が浮いている事に気付く。

「（罨……でも行ける！）」

自分の方が早く俺に攻撃を当てられると思ったのか、一夏は加速を
緩めずに突っ込んできた。
はあ、無駄だっつの。

「停止凍結フリーズアウト」

14の剣群は一斉に動き出し、一夏に撃鉄が落とされる。

『試合終了。勝者 秋山 栞』

その瞬間俺の勝利が確定。

もともと少なくなったエネルギーを更に消費させ、しかも攻撃を受けたのだ。

一夏のISのエネルギー残量が0にならない筈がない。

「んあっ……疲れた」

「それならわたくしが特別にお背中を流しますわ」

「……無理」

流石に今日は必死に拒否できるほど騒げるテンションではない。言うておくがかなりきつかったんだよ。

「……あら、そう。残念ですわ」

それを見てか、セシリアも少し元気をなくす。なんでこいつまで元気なくすんだよ。

いつもみたいに隣で馬鹿やってくれてた方が変に気を使わなくて楽なのに。

「はあ」

「す、すいません！」

「……なんで急に謝るんだよ」

「なんとなくというか……わたくしのせいで溜め息を吐いたのかしら、と……」

「くだらねえ。そんなわけないだろ。お前が俺になにしたよ」

「この1週間ずっと隣にいて鬱陶しく思ってた……」

「なんだよ、急にしおらしく。」

「いつものウザいくらいの元気はどうした。」

「まあ『黙っていたら誰も近寄らない』と言われるほど俺は他人から見れば恐いらしいが。」

「デカイし、そこそここついしな。」

「鬱陶しかつたらとくに部屋から出てるし突き放してる。というかそもそも鬱陶しかつたら俺は素直に鬱陶しいって言うから。お前は別に鬱陶しくねエよ。溜め息吐いたのはあれだ。お前に変な氣を使わせちまつてる俺自身に落胆したからだ。だからきにすんな。お前はいつもみたいに隣で馬鹿やってる。あ、でも自重はしろよ?」

「はあ、一気にしゃべったらまた疲れた。」

「自重しろって言ってもこの作者同様に自重しないんだけだな。」

「あれ? 作者って誰よ? いや、どうでもいいか。」

「ば、馬鹿って……! わたくしは椛さんのためにと……!」

「わかってる。わかってるから怒るな。だから約束守ったじゃねエか。今日、約束通り勝っただろ?」

「ふ、ふん! 少々危なげでしたけど?」

「作戦だよ。それとお前の声援も聞こえてたぞ。ありがとな」

「桜さん……！ではさっそくお背中を」

「流さなくて良いからな」

世界は今日も平和である。

ただ俺がクラス代表になったこと以外に関しては。

青春日記7日目 クラス代表就任パーティ

春眠暁を覚えずとはよく言ったものだ。
宵になっても眠いぜ。

「というわけでっ！秋山くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

パン！パンパーン！クラッカーが乱射される。

俺の頭に乗ってき紙テープとは裏腹に、俺の心にははるかの重くのしかかって来る。

今は夕方の自由時間。場所は一年寮の食堂、1組のメンバーはみんな集まっていた。

しかしあれだ。なにもめでたくない。

クラス代表なんてやってられるか。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

……なんか人数多いぞ。

クラスの行事である筈なのに、明らかに30名を越えている。

「よかったなー、栞」

「ほう、俺が喜んでいる様に見えるのか、お前には」

「おお！すっごい嬉しそうだ！」

「なら変わってやろうか？」

「いやいや、クラス代表なんて滅相もない！ここは栞さんに一任しますよ！」

「遠慮すんなって。俺はお前の方が器がデカイと思うぞ？」

「そんな御冗談を」

「冗談なんて、そんなことあるわけないだろ？俺は本当にそう思ってるぜ？……ん？」

俺と一夏が顔を引き攣らせながらなんと責任転嫁をしようとしていると、なにやら妙に女子たちの視線が刺さった。

今は4月下旬。そこそこ温かくなっており、しかも室内は空調も聞いているため少し熱いくらい。

そうなると俺も一夏もブレザーを脱いでカッターの襟首を大きめに開いてるわけで、そういう風に見えるらしい。

やっぱ腐ってやがる。早過ぎたんだ。

「……おい一夏、どうしてくれんだ、この空気」

「栞がやり始めたんだろ？」

いや、確實にお前からやってきただろ。

「やっぱり攻めは秋山くんね」

「弱気な織斑くんを有無を言わず攻め立てる……」

こいつら本格的にダメだ。

誰か救世主、と思いきやセシリアを見た。

「ふんっ！」

しかし何が気に入らないのか、機嫌を損ねた様にそっぽを向かれた。俺が一夏と話することがそんなにイヤか？

いや、一夏とセシリアは最近少し打ち解けて来たからそれはないかな。ならなんだ？あいつには俺が女子に囲まれてきやいきやいわれて浮かれてるでも思っているのか。

「はいはい、新聞部です。話題の新生コンビ、織斑一夏さんと秋山椋さんに特別インタビューをしました〜！」

こっちが本当の救世主か、有り難い。

何度か救世主と思ってパンドラの箱を開いてみれば悪魔だったこともあるが、今回は絶対に救世主に違いない！

インタビューに悪い人はいない（キリッ

「あ、私はまゆみ黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

名刺を受取って名前を見るが、なんか『黒』っぽい名前だな。好きな色は黒だ。違いない。

「ではずばり秋山くん！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

そんなに無邪気に目を輝かせても俺からは何も出ないぞ？

「えーと……」

ここで入学式の日の恐怖がよみがえる。

いや、あの日以上だ。

クラス全員に加え、他クラスの面々、しかも先輩の前で、レコードもされる。

これは実に耐えがたき事かな。

面白いことを言わなければ暗いレッテル……は貼られないか、もう。

「代表戦、1位を取ります！」

おおっと周りから歓声が上がる。

ビッグマウス？そうですがなにか？

容姿はともかく、そういうところはかつこよくありたいじゃん？

「『クラス代表戦で女子を叩きのめす』と……」

いやいや待て待て！

なんだその情報操作。

確かにそう言う意味合いで取れるがさわやかさがちがうだろ。
ねっとりし過ぎてるんだが。

「ちょっと」

「じゃあ次織斑くんにも聞いておこうか」

俺には興味なしか。

「えっと……なにをですか？」

「Sっ気漂うクラス代表の受けとして」

そう言う意味でさっきのねっ造か。

納得

「「っであるか！そんなこと！」」

「じゃあ適当にねっ造しておくから」

この人危ないぞ……。

なんでもかんでもねっ造して俺のイメージを崩す気だ。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

そんなこと言いつつも近くまで来てたのはどのどいつだよ。

ホントはこういうの大好きなくせに。

目立つの大好きなくせに。

しっかりメイクまでしちゃってるくせに。

キッ

やーいやーいとニヤけながら念を送ってやったら睨まれた。

この眼力があるから女はISを操作できるのだろうか。
未恐ろしいな。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表決定戦を辞退したかとうと、それはつまり」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

俺も長くなるな、と思った。

語らせたら1時間でも2時間でも平気でペラペラペラペラ、座敷わらしみたいに饒舌だ。

キッ

またも睨まれた。

どうやらセシリアはこの学園に来てから読心術というのを学んだらしい。

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、秋山くんに惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

いや、気付いてるんだけどね。

いざ人前でそう言うことを言われるとやっぱり恥ずかしいものなのか。

顔を真っ赤にして、ゆでだ　危ない、また睨まれる。
しかしセシリアは顔を赤くするのが本当に得意だな。

取り敢えず援護射撃してやるか。

「そんな馬鹿な」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですね！何をもって馬鹿としているのかしら？」

いや待て。なんで援護射撃をした俺に照準を合わせてくるんだ。

「だいたいあなたは」

「はいはい、とりあえず3人並んでね。写真撮るから」

「え？」

意外そうなセシリアの声。

確かに以外だ。俺と一夏だけで良さそうな気が

キッ

しなくないなー。

やっぱ3人で撮るべきだよなー。

「注目の専用機持ちだからねー。仲良さそうにしてくれるといいかな」

仲良さそうも何も、仲は良いけどな。

俺の両サイドにいる一夏とセシリアはそこまでではないが。

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

なにモジモジしてるんだ。

さつき睨んで来て『わたくしと一緒に写真に写るのがイヤなのか？』みたいな念を送って来たくせに。

というか3人だし、そんなにモジモジする様なものでも無いだろ、ツーショットなら未だしも。

「あの、撮った写真は当然頂けますわよね？」

「そりゃあもちろん」

「ではさきにこちらのお2人を撮られてください。わたくし今直ぐ着替えて」

「時間掛かるからダメ。さつさと並ぶ。あとでセシリアちゃんと秋山くん、秋山くんと織斑くんのツーショットもすぐに撮るから。はい、じゃあもつと寄って」

やっぱり人前じゃ恥ずかしいのか、寄って来ないセシリアと、そんな俺とセシリアを見て寄って来ない一夏。こいつらダメだな。

ガッ

「え？え？え？ええ！？」

「うおっ！何するんだ椀！」

仕方ないから肩を持って両方抱きよせてやった。

正直かなり恥ずかしいが、満面の笑みで。

「はい、じゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「74・375！」

なんで答えられたんだろう、不思議だ。
というかなんだそれ。

「おっ！せいかーい」

カシャ

全員入って来るかと予想したが、予想は外れた。

「なん筈が入って来るんだよ」

そんなに俺たち3人だけで写真に写ることが気に入らなかったのか、
ぶすつとした表情で俺と一夏の間割り込んできた。

俺が一夏を取るとでも思ったのか？

そんな馬鹿な。流石に男は無理だ。

「はい、じゃあセシリアちゃんと秋山くんのツーショット撮ろうか」

これは撮る必要があるのかわからないが、先輩の言うことなら仕方
ない。

それに隣で妙にそわそわしてるヤツがいるし。

「さっきは秋山くんからだっただけ、今度はセシリアちゃんが抱き
ついてみよう！」

やりたい放題だな。

そんなことでいいのか、副部長。

少なくとも俺はダメだと思う、絶対に。

「し、仕方ありませんわね……」

仕方なくねエよ！

なに勝手に承諾してんの！？

こっちの身にもなってくれ！

「セシリアちゃん、ちょっと来て」

「なんですの？」

ひそひそ……

「わかりましたわ！」

なにがわかったんだ。

ISでも起動させて聞きとれば良かった。

「はい、じゃあ近代哲学の父と称されるフランスの哲学者の名前は！？」

そう言う作戦か、わかったぜ。

俺が戸惑っている内に撮ってやろうという作戦だな？

しかし甘かったな。

倫理　　というか社会科　　で俺に挑もうなど笑止千万！万死に値する！

しかもこれ中学生レベルだから。下手したら小学生も知ってるぜ。

「ルネ・でか　うわっ！」

少し余裕の表情を浮かべたタイムラグがまずかった。

というより答えを頭の中で探すことに集中してセシリアのことを忘れていた。

だがしかし

「あ、あなたたちねえっ！」

みんなが俺を助けてくれた。写真に割り込んでくれたのだ。

いやあ、友情って素晴らしい！1組の団結力ここにあり、だな。

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

俺は本当に良いクラスメイトを持った！

IS学園万歳！

「う、ぐっ……」

苦虫を噛んだような表情で、嬉しそうな俺を見て嬉しそうに少し頬を赤らめる。

あれ？それは勘違いじゃないのか？

俺が喜んでいるのはクラスの団結力の強さなんだけどなー。ナンデカ

ナー？

そのあとは俺と一夏のツーショットを撮ったのだが、やれ「くつつけ」だの「抱きつけ」だの「キスしろ」だの「押し倒せ」だの色々黄色い声が飛んできた。

無論、そんなことをするはずはなく、2人で肩を組んでピースという普通の結果に終わった。

青春日記8日目 夢の助長

はあ……朝から憂鬱だ。

別にセシリアのせいではない。

というよりセシリアは自分勝手だが俺のこともしつかり気遣ってくれるので憂鬱な気分になったことなどない。

「（はあ……イヤな夢を見た）」

問題はそう、夢。

小学校の頃俺が海外を飛び回っていたというのは言ったよな？

でもずっとそういうわけではなくて、2年生の時くらいだろうか、俺は日本にいたんだ。

その時に知り合った女が、昨日の夢に出て来た。

しかもそいつは中学に入って2年まで同じクラスだったんだから性質が悪い。

「織斑くん、秋山くん、おはよー。ねえ、転校性の噂聞いた？」

転校生、か。

俺にはあんまり関係 なくねえ！

あれ？この前シャルとラウラが転校してくるって言ってたよな！？まさかどっちかか？

これはまずい。逃げたい。死にたい。

別に疾しいことがあるわけではないが、ラウラとかいきなり殴ってきそうだし、シャルはなにかと良い子良い子してあげたいけど……それはどうでもいいか。

兎に角知り合いというのがばれたらまずい。そういうことにしてお

こう。

「名前とかわかる!？」

なんか興味津々そうになってしまったが、この際どうでもいい。

俺とヤツらが知り合いでないという設定にしておいた方がなにかと楽だ。何かとな。

「え？中国の代表候補生みただけどまだ名前はわからないよ？」

……ほつ。

思わず安堵のために心でお茶をすすった。

中国かよ。それなら知り合いいないから大丈夫だ。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

俺はその話題には一気に興味が覚め、話題には介入せず傍観をすること。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐことの程でもあるまい」

しかもこのクラスへの転入ではないらしい。

さつきすぐそこを通り過ぎてリターンしてきた一夏大好きな篤さん曰く。

これは本格的に興味が無くなった。といよりどうでもいい。

あの2人以外にこれといって深い仲になったヤツもいないしな。

「（はあ……ラッキー）」

このまま転校して来なければいいのに。
いや、会いたいただけどさ。すつごく会いたいけど。久し振りだから。

でもなんか、ほら、気まずいじゃん。

「あら、栞さんどちらに行かれるのですか？」

「ジュース買いに行ってくる」

「それならわたくしもお供致しますわ」

「あつ、わたしも行くー！」

「わたしもわたしもー」

……… つつもこれだ。

一夏でも俺でも、男が何かしようとしたら女子が10人近くついてくる。

この現象を人はダンディズムというらしい。

スケバンやヤクザ、風俗じゃないんだから、女子をぞろぞろ引き連れて歩かされるこっちの身にもなつてほしい。

そんなことを思いながらジュースを買い、教室に戻るとなにやらドアの前でギャンギャン騒いでいる女子がいる。

髪型はツインテール。そして背が低い いや、俺からすればモデル並みの体系出ない限り低いのだが。

しかも聞き覚えがある様な、ない様な声。

いや、中国の代表候補生がまさかあいつなんてことは

「（ないない！有り得ないって！）」

俺は自分が考えたことで心の中で爆笑しながら否定して、教室のドアの前に辿り着く。

やばい、間違いなくこいつは知り合いだ。

しかしどうでもいい様なヤツだ。興味がない。というかキライ。

「中国代表候補生、ファンゼンイン 鳳鈴音」

やっぱりそうだった。

うぜえな、教室の前に陣取りやがって。

ドンッ

「いたっ……なにすんの……よ……」

俺は痛がるそいつを無視して、とにかく自分の席へとついた。尻切れなのは痛いからじゃないだろう。実際反射で言っている様なものだ。

周りの女子も俺の不機嫌を感じてか、女子にぶつかったことに対して誰も文句を發さない。

やっぱりこのがたいで不機嫌だと、それだけで怖いよな。

というか180越えてるだけで喧嘩とか強そうに見える不思議。

「（すっげー見られてるんだが……）」

ギャンギャンと騒いでいたさっきまでの勢いは何処へやら、そいつは俺の方をずっと見て来ている。

どんな表情とかは見えてないからわからないが、兎に角視線を感じる。やめてほしい。

身の毛もよだつレーザー光線だ。

パアンッ！

そこで悪魔が登場。

俺のことを助けてくれようが、この人だけは絶対的悪魔だ。
すぐに人のことを叩く。

『暴力で何でも解決できるとは思っていない。暴力で解決できることなら解決させる』という考えの人だから。
なにはともあれ、それでそいつは去って行った。

「（夢に出て来たと思えば今度は現実に出てくるとか……うぜえ）」

俺はイライラから千冬さんがいるということもお構いなしに寝た。

パアンッ！

「朝から寝るな、馬鹿者」

しかしこっちの事情はお構いなしで頭部を強打してくる、あの硬い出席簿で。

夢の所為で寝不足なんだ。

寝かしてくれても良いだろうに。

とも思ったが打撃により睡魔は吹き飛び、恨めしい事にイライラだけが残った。

「（ついでにこのイライラも吹き飛ばしてくれたらいいのに……）」

俺が無理なことを心の中で臨んでいると、SHRは終わり、一時限目の授業が始まった。

「もう！椛さんのせいで午前中にわたくしの脳細胞が10万個死滅してしまいましたわ」

10万個……一回で5千だっけ？

あれ？単純な計算なのに全然わかんねえ……。

「悪い」

昼休み、セシリアは俺を元気づけようとしてくれたんだろうが、とてもそんな気分にはなれなかった。

ホントに悪いと思うし、みっともない。

私情で人を困らせたりするなど、とことんダメな男だ。

それと授業中明らかにクラスの雰囲気悪くして、山田先生も困らせちゃった。

「（ム力つく……！！）」

なにより自分にム力つく。

一回頭を落ち着かせようと、糖分を摂るために珍しく1人で自販機へと向かった。

珍しいというか、この学園に来てから初めてだな。

「ちょっとあんた……」

朝と全く同じ声。しかしトーンが少し低い。

ま、俺には関係ない。

「無視しないでよ!」

知るか。

叫ぶそいつを無視して俺はそいつの隣を通り過ぎる。

「なんで!?!どうすれば許してくれるの!?!わかんないよ!」

目に涙を溜めて叫ぶが、それでも俺は無視して教室へと帰った。

「あの……織斑くん?」

「ん?どうした?珍しいな、セシリアの方から話しかけて来るなんて」

椀が教室から出て行ったあと、セシリアは一夏の席へと歩み寄った。この人ならなにか知っているのではないか、という期待が頭に過ぎったから。

「椀さんのことについてですが、あの方とはどういう御関係で?」

セシリアが自分から一夏に話しかけたということと、椀の話題ということが重なって、1夏の机の周りにはクラス全員、椀以外が集まって来ていた。

「(いや、これは言っていないのか?椀の許可が必要だろうし、でも

この様子じゃ話すまでどいてくれそうもないよな……。当たり障りない程度で説明するか。俺までとばっちり喰らったら敵わない）
そうだな。俺と椀、それと鈴は同じ中学だったんだよ、3年の時までな。俺は小5のときからずっと鈴と同じ学校で、椀は小学校低学年の時に鈴と同じ学校だったらしい。中学で再会した時は椀も鈴も喜んでたよ。それから少し経って2年の時のある日

「中学2年の冬、俺と一夏、それに鈴と五反田はよく一緒に遊んでいた。」

その日は初めて俺の家に来的ることになったんだけど、五反田は来れなくて一夏と鈴の2人だけが来た。

このときはもちろん既に両親はおらず、1人暮らし。

「うわー、ボロいねー」

人の家を悪く言うんじゃないよ。

「安いから良いんだよ。鈴にはわからないんだろうけどな」

ローンがあるのに引越なんて無理だし。

「で、今日はなにするんだ？」

「まーゲームでもしようか」

特に反対意見もなく、鈴の提案通り3人でピコピコとゲームを始め

る。

「つまんなーい」

最初にこう言いだすのは決まっつて鈴。

自分が提案したことなんだから責任持てよ。

「他になにかないの？おもしろいこと」

「貧乏学生に期待されてもな」

そう言うが、なにやら鈴は嬉しそうで、
なにもないのに嬉しいのか、こいつは。
アフリカでも強く生きていけるんじゃないの？

「ニッシシ……探検しよう！」

「は！？ふざけんな！」

しかしここで言うことを聞かないのも鈴。

どんだけやんちゃツ子だよ、なんて思いつつもそんな後ろ姿を見て
微笑んでいた。

うちは一軒家。

ぼろいけど、1人暮しの俺にとっては使っていない部屋も多く、掃
除をしてない部屋もある。

だから「きたなーい！」とか「くさーい」とか、あいつは普通に言
いやがる。

木造建築舐めんな。

「ギャフツ！」

なにか潰れたか？

「馬鹿だな」

「だな」

俺と一夏は鈴の騒ぐ声を聞きながら笑っていた。
しかし次の瞬間。

ガラララッ……

家の中で、何か大きな崩れる音がした。

一夏と見合わせていた顔も笑顔から絶望の表情になる。

「鈴！」

俺は鈴の身を案じて走った。
現場は仏壇のある部屋。

「うう……」

鈴の上に倒れ込む仏壇を一夏と持ち上げ、鈴を救出。

「怪我ないか!？」

「ううん、大丈夫。でも……」

鈴は幸い怪我をせずに済んだが、俺の大事なモノが1つ壊れていた。
それは世界で2つと無い、家族全員で写っていた写真。見事に真ん

中が切り裂かれていた。

俺の顔が見事に真つ二つ。

親が死んで、もう2度と撮る事の出来ない、俺の一番大切なもの。

「……良いよ。別に。お前が無事で何よりだ」

でも今はそれよりも大切なモノが近くにある。

一夏や鈴、それに五反田も。

物は簡単に壊れても人と人のきずなは簡単には壊れない。

「でもホントによかった。鈴が無事で」

「そ、そうだよ。壊れたのがたかが写真で、桜もよかったじゃん」

プチンッ。いや、プチン

なにかが切れた。

今まで一度も切れた事のない、太い何かが。

「たかが写真！？ふっざけんな！テメエにはこれが俺にとってどれだけ大切なものかわからねエだろうが！もう2度と撮れねえ、世界でたった一つの思い出なんだよ！それをたかがだと！？なにも知らねエくせに俺の家族を語るんじゃないよ！」

「も、桜………今のは、ちが………」

「帰れよ！テメエの顔なんざもう2度と見たくねエ！」

「だからちが………」

「帰れよ！」

たぶん俺は泣きながら叫んでた。

鈴木もそんなつもりがあつて言つたんじゃないと思う。

けど、その時の俺にその言葉はあまりにも重過ぎて。

俺が壊れないと思つていた絆は、あつさりと壊れてしまったんだ

「つてわけだ。

（やばい。全部喋っちゃつたけどいいのか？ ついつい、というか流
れるに、というか……悪い！ 椀！）」

「そんなことがあつたんだ……」

「それはわたしでも怒っちゃうかも」

ガララッ

「（……なんだこの重々しい雰囲気。俺の所為で何処に行つてもし
んみりムードか。はあ……）」

というかなんでクラス全員が一夏の席の周りに集まつてるんだ？

セシリアまで……珍しいこともあるんだな。

まさか一夏が昔話とか披露してたり。桃太郎辺りを。

「なあ、一夏」

「な、な、なんだ!？」

声裏返らせて、何動揺してんだ。

「みんなを集まらせて何やってんだ? 昔話とか?」

その瞬間空気がピシッと音を立てて固まった。

まさかそんなに滑ったか? 元気が無い時はこれくらいが限度なんだが……はて。

もうあいつのことは考えない様にすればいいだけだし、クラスの雰囲気が悪いのも申し訳ないから元気づけてやろうと思ったのにそこまでしなくても……。

しかも俺元気が無かったんだから、そこら辺は嘘でも笑おうぜ。

「悪い!」

「ごめんなさい!」

は?

なんで一夏もクラスのみんなも謝るの?

そこまで面白くなかった? 謝られるほどに面白くなかったのか!?
どんだけ気を使われてるんだよ。

まさか俺がいない間に昔話を披露したり聞いたりしたことを謝ってるのか?

それは謝られる様な事ではないと思うがなあ……。

「いや、謝らなくても。たかが昔話だろ?」

「い、いいのか?」

「なんでそんなに焦ってんだよ？俺がいなくてここで昔話したことをそんなに悪いと思ってるのか？」

「あ、ああ……」

「わたしたちも、ごめんなさい……」

そこまで！？

ちよつと待つて！

今日のみんなおかしいぞ！？

そこまで気を使わなくても良くないか？

「そんなことくらいで怒るかよ。なんだそりゃ、意味がわからん」

「いや、わからないのはこっちなんだが……。昔話をしたんだぞ！？お前のいないところで！みんなに！」

一夏もとうとう頭がいかれてきたのか。
非常に残念だ。

こいつは正常者だと思っていたのに。

「わかった。で、なんの昔話をしたんだ？桃太郎か？金太郎か？浦島太郎か？」

「（なんだ、昔話つてそつちか……）」

クラスのみんなが何故かホツと胸を撫で下ろした様な気がしたが、やっぱりまた固まっている。

「（いや、待て！これは鎌をかけて来ているのか？突っ込むべきか？）」

「な、なんで太郎ものばっかちやねーん、でしゅわ」

『（突っ込んだ！そして噛んだ！）』

どうやらセシリアまでおかしくなっちゃったらしい。

こんなことに突っ込むキャラではない筈なんだが。

っていうか『でしゅわ』と『ばっかち』ってなんだ？

かわいい間違いだな。顔真っ赤にしてるし、よく頑張ったよ。

っていうかみんなが妙にそわそわしてる。

まさか ！！

「（そんなにみんな突っ込みたかったのか！？それでセシリアの何とも言えない突っ込みで突っ込むに突っ込めない、そんなところか）」

「

「お前はいつまでふざけているつもりだ？本当はわかっているのだから？何の話をしていたか」

『（篠ノ之さーーん！それはストレートすぎ！）』

一夏の嫁は何を言ってるんだ？

そんなに迫真の表情で言うことか？

「太郎ものじゃないなら……花咲じじいとか、こぶとり爺さんとか？」

『（今度は爺物キター！これどこまでが本気なの！？この緊迫はい

つまで続くの!?)」

クラス全員の心の声が聞こえた気がするが、気にしないでおう。

「な……」

『(な?)』

な?

今度は何を言うのだろうか、セシリアは。

それにしても今日のセシリアは面白いな。

こういうことに積極的に参加して来るなんて。

さあ!どんなツッコミでも返してあげますよ!どんとこい!

「なんで年とつとんねーん!」

「ぷっ……」

一夏の嫁がセシリアのツッコミを聞いて噴いた。

太郎が歳をとってジジイになったっていう解釈で問題ないよな?

いや、それにしてもこれはなかなか秀逸だ。

「セシリアさんなにそれー」

「わかりづらーい」

篝さんを皮切りに、緊張の糸が緩んだのかみんなが次々と笑いだす。よかった、いつもの教室の雰囲気に戻って。

「(栞はホントに気付いてない!?よし、それならこのまま　!)

「

「一夏、ちょっと良いか？」

「い、いや、俺は……」

「いいから来ようか」

「はい……」

満面の笑みで一夏を睨み、みんながセシリアを弄っている内に連れて出る。

「お前さ、あの時のこと話しただろ」

「さ、さあ？」

「しらばつくれると殺すぞ？」

「はい、話しました……」

（やばい！殴られる　！）「

「……はあ。悪いな。そんなことさせちまって。あとありがとな」

クラスに帰った時から気付いてたさ。

あんなどんよりした空気で気付かない方がおかしいだろ。

あそこでホントのこと言われてもこっちも重いし、見抜いていうのも重いから。

「セシリアー。なかなか秀逸なツツコミだったぜー」

「そ、そうでしょう？ 当り前ですわ」

「えー？ そう？ 少しわかりにくくなかった？」

「そうか？ 俺は一発でわかったぞ」

暗い雰囲気より、こういう楽しい雰囲気の方が俺も気が楽だしな。

青春日記9日目 こんなルート聞いてませんか？（前書き）

どうしてこうなった？

それはシリアスが苦手だからということだ

青春日記9日目　こんなルート聞いてませんか？

コンコンッ

「はい」

突然の来客。誰だろうか。

もう時刻は11時を回っていて、隣ではセシリアがスースーとかわいらしい寝顔で寝息を立てている。

いつもはこんなに早くは無いのだが、今日は色々と疲れたのだろう。起こしてはまずいと思い最低限の大きな声で返事をして、扉のある方へ向かう。

因みに風呂上がりで体が火照っている。

というのも、セシリアが起きている間にシャワーを浴びるとなにかしらが起こるので、寝ている間に全てを済ませるのだ。起きている間に起こる、なんつって。

「も、桜……」

馬鹿なことを考えてニヤケ顔でドアを開けたら、そこには目の周りを赤く腫らした鈴の姿が。

さっきまでニヤけていた顔が一気に冷めた。

今言ったこと全然面白くねエじゃん。

無視してドアを閉めたい。

しかし押し売りセールスの様にドアを閉めればこいつも自然にかに入ってくるような状況なのでそれも無理。

またここで大声出されてセシリアを起こしたりみんなに注目を浴び

るのはごめんだ。

「……来い」

それだけ言って部屋を出て、俺はスタスタと食堂へ向かう。
8時以降は何があっても食事は出来ないが、あそこは静かで話もし易いだろうから。

「……歩幅」

後ろで鈴が急にそんなことを呟いた。
歩幅？歩幅にまで難癖つけられたらたまらないんだが。

「あたしに合わせてくれてるの？」

知らず知らずのうちに鈴の歩くペース　と言っても中学時代のだが、今も大して変わってない　に合わせていたらしい。
こういう無意識のうちに人に合わせるのが俺の癖なんだ。
ISでの戦闘時と同じ。

常に相手への最善の武器を投影して対処する。
まあ性質上仕方ないんだけど。

「黙ってついて来い」

むしゃくしゃするのに、やっぱり歩幅は変えない。
これはあれだ。癖だから。意識的に変えるつもりもないから仕方ないんだ。

「それで、何か用か？」

食堂に着き、窓際の2人用の席の片方に俺、向かい側に鈴を座らせる。

窓際を選んだのは外を見るとなんとなく落ち着くから。

学食には案の定誰も居らず、静かな空間に更なる静かな空間を俺と鈴が作りだす。

「あの、さ」

予想以上に響く声。

学食に反響みたいなシステムいらないと思うんだが。

「あたし、椀には本当に悪いこと言ったと思ってる」

「そう」

俺はただ相槌を打つだけ。

「ならなんですぐに謝ってくれなかったんだよ」とは言わない。
実際あの時悪いのは俺だった。

鈴を止めなかった俺、たかが写真程度でキレた俺、その後も近寄るなどと言わんばかりの雰囲気を出して寄せ付けなかった俺が悪い。
実際鈴も悪気があって言ったわけじゃない、言葉の綾だというのもわかっていて、それでもそんな態度しか取れなかった俺が悪い。

「悪気はなかった、なんて言うのはおこがましいよね。椀の大事なモノ壊しちゃって、あんなこと言っただから」

「そう」

大事なモノ、か。

今考えてみれば本当に鈴の言う通りたかが写真だったんだ。

「あの時は気が動転していて、椛に近寄るのも怖かった」

それも俺の所為だけだな。

しかし、相変わらず親しく『椛』って呼んでくれるんだな。

あんなことがあっても。

俺も心じゃ鈴とは言ってるが、とても口には出せそうにない。

「それで謝れないまま中国に帰ったこと、すごく後悔してた。帰国した理由は椛から逃げたかったわけじゃないの。

（むしろずっと一緒にいたかった、なんて言えないよね）

実はうちの両親が離婚しちゃってね、それで、母方に引き取られて帰国しちゃったんだ。ほら、今の時代は女性の方が優遇されてるから、親権は母親にあって……」

「なんで……なんでだよ……！」

「離婚したのは」

ダンッ

「そうじゃねえよ！」

テーブルを思いっきり叩き、思わず大声を上げる。

それに驚いたのか、鈴は少しおびえた表情でこっちを見上げてきている。

離婚した理由なんて聞きたいんじゃないよ。

そんなの人それぞれだ。家庭の事情はどこでもある。

親権が母親にある理由を聞いているわけでもない。

おじさんもおばさんもとてもし良い人だったから、どっちに引き取ら

れても鈴は幸せな筈だ。

2人の時より不幸でも、少なくとも幸せな筈だ。
それなのに、それなのに

「なんでお前はこんなところに来てんだよ！なんで自分から親から離れるんだよ！」

一緒にいて欲しかった、鈴には。

家族と一緒にいることは普通だ。しかしそれ以上の幸せもない。

それなのになんで鈴はわざわざ自分から離れてこんなところに来るんだよ。

やっぱり、これも俺が悪いのか。

「俺への当てつけかよ！ふざけん」

「違う！あたしは、あたしはただ謝りたかったの！あんたにもう一度笑顔を向けて欲しいだけなのよ！あたしにとってあんたは家族より大切な人で、家族よりそばにいたい人なの！それなのになんで無視ばかりするのよ！馬鹿あ！」

気圧された、というより、初めて鈴の本心を聞いて動揺していた。そういう、恋愛感情の様なモノは俺と鈴の間にはないと思っていたから。

俺の中での鈴はずっと一緒にいて馬鹿の出来る気の良い女友達みたいなもの。

「なになに、今の大きな声……」

なんだっけ、名前が思い出せん。
だぼだぼなパジャマを着た、そう、のほほんさんが目を擦りながら

やってきた。

俺の声か、それとも鈴の声か、どっちにしろこんな現場を見られるのは不味い。

ただでさえ一回泣かせたことが全校に知れ渡っているんだ。

2度目とならば鈴に変なうわさが立ち兼ねない。

「（くそっ！）」

やりたくはなかったが、子供みたいに泣く鈴の頭を胸に抱いて音を殺し、テーブルの陰へ隠れる。

「（うつぐ……）」

鈴のすすり泣く様な声が直接心臓へと届く。

しかしやつぱりあんなことを言った手前恥ずかしいのか、目もほっぺも真っ赤にしたまま俺を睨んでくる。

「（放して！）」

「（出来るか、アホ！貧乳は少し黙ってろ！）」

「ひんにゅ　　！！」

「あれー？そこに誰がいるのー？」

気の抜けた声がして、床と服が擦れるような音がだんだんと近付いて来る。

「（いいか？これで互いに一番言われたくないことを言った。つまりおあいこだ。だから黙ってろ）」

いや、起こした？」

「あれー？もみりんだー。こんなところでなにしてるの？」

解放すればギャンギャンと騒ぎそうな鈴の口を抑えながら、頭だけ出して対応する。

幸いインテリア的な植物　正式名称は不明　があり、更に俺の高身長とのほほんさんの低身長もあって鈴の姿は向こうには見えない筈だ。

「少し考え事。そっちは？」

「うーん、なんか大きな声がした気がして見に来たんだけど……気のせいかな？」

「気のせいだろ。ずっとここにいたけど誰かが来た様子もなかったしな」

「そっか。それじゃあおやすみ」

「おやすみ」

……はあ。

怪しむ様子もなく、のほほんさんはいつも通りゆっくりとした足取りで食堂を出て行った。

「あんだねえ！触れてはいけない事に関して触れたわね！？」

静かに叫ぶという、とても器用な真似をする鈴。

俺には無理だ。どついう原理でやっているかさっぱりわからん。

「いや、良いと思うぞ。俺は好きだ」

大きさじゃないのだよ、胸は。
形なのだよ。

なんて熱弁すれば軽く引かれるのは必至なので好きという旨だけ伝えておく。

胸が好きという旨、なんつって。

いや、まあ鈴の胸の形なんて小学校の時以来見てないけどな。

「な、なに急に変なこと言ってるのよ、変態！」

俺はよく好意を寄せてもらいながら変態扱いされるらしい。
セシリアにも、こいつにも。

「それより……ほら、もう泣くなよ。かわいくねえから」

「なっ！？失礼にもほどがあるわよ！」

「怒るな。かわいくねえから」

「あんたねえ……！！」

「笑え。それが一番お前に似合うし、数ある表情の中でそれが一番かわいいぞ」

「か、かか、か……！！」

ぼつと湯気を出し（比喻ではない。実際に出た）鈴は顔を真っ赤にする。

そういうのもいいけどな。

ってというか普通に話してんな、俺。

「それとごめんな。俺のせいで」

「な、なんのことよ」

「写真のことだよ。今考えてみれば本当にお前の言う通りたかが写真だった。形にこだわってたあのころが馬鹿みたいだ。思い出は永遠にここにあるって気付かされた」

トントン、と自分の胸を叩いて見せる。
因みに胸囲は鈴より俺の方が大きいぞ。

「くっさ」

「黙れ。ない乳」

「ぶつとばすわよ!？」

迫真の表情で迫って来るが、さっき俺に胸を褒められたからか、迫力は全然なかった。

「あとありがとな。お前のお陰で写真より、家族の思い出より大切なモノがあるって気付かされた」

「それって……」

俺の顔を見つめて来て、ほっぺを赤らめ、期待の眼差しを向けてくる。

何を期待してんだ、こいつは。

「お前」

「やっぱりあたし!？」

黙って最後まで聞けや、コラ。

都合のいいところで切ってんじゃないぞ。

そんな嬉々として笑顔向けられても秋山さんは屈しませんよ。

「とか、一夏とか、五反田とか、そういう親しいヤツだよ」

そう言った瞬間今度はぶすつとした表情になる。

よくこころごとと表情が変わるもんだな、女っていうのは。

今セシリアとかクラスメイトの名前を入れなかったのはこいつが知らないからであって、大切に無いわけではない。

「あつ、そうだ、これ」

何かを思い出したかのようにポケットから何かを取り出す。
その手には小さな3人で写った家族の写真。

「これ……」

「あたしにはこれくらいしか出来なかったから」

今度は申し訳なさそうにその小さな写真を渡してくる。

科学の技術ってすごいな。

まるで破れた部分がわからねエ。

しかしなんで小さいんだろう。証明写真くらいの大きさだ。

ここまで小さいと写真立てには飾れそうもない。

「おっ！これがあつたな」

待機形態のサーヴァントがロケットだったことを思い出し、服の中から引つ張り上げる。

そしてまだ写真が入っていなかった　クラス全員で撮った写真を入れようかとも思ったが、シャルとかラウラ、それに鈴とかほかもるもろも写ってないし、一夏も箒さんも写ってないからやめておいた　ロケットに写真を入れた。

「ありがとな。でも俺はどうすりゃいいんだ？」

「なにがよ。お礼なんて要らないわよ。これはあたしからの謝罪の意味を込めてだから

（出来ればデートとか誘って欲しいけどさ……）」

「俺もお前の胸のこと言っちゃったしな。……もしかしてお前胸が欲しいのか？それはあげようがないぞ？」

「なんでそうなるのよ！馬鹿！それに、ほら……楳が小さくても良いつて言ってくれたから……」

もじもじすんな！

楳の前でもじもじ、なんつって。

いや、そんなくだらないことはどうでもいいんだ。

胸はあげられないけど、出来る事ならいくつかあるかな。

「冗談だろ？あつ、小さいのが好きなのは本当だ。こう　じゃなくて。今度どっか行くか。写真の礼に。2人で」

思わず語りそうになってしまったところを鈴のジト目を見て緊急回避し、なんとか買いい物でも持ち掛けてみた。
因みに緊急回避はダッシュしながら×ボタンだ。

「そ、それって……」

「ああ、デートみたいになるのかな」

特に意識することでも無いのでサラッとと言うと、鈴はまた湯気を出した。比喻ではない以下略。

やっぱり女子高生ってそういう単語に過剰なのかね。
はあ、よくわからんなあ、女子高生。

「じゃあな。俺はもう寝るわ、おやすみ」

「う、うん……」

その場で直立したまま動かないが大丈夫か？
まあそのうち頭が冷えて部屋に戻るだろうから心配は無用か。

『熱愛発覚！？噂の男子、秋山栞と転校生の凰鈴音！デートの約束をする！（秋山栞は貧乳好き！？）』

ふざけてやがる。

新聞部、ふざけてやがる。

そしてふざける。

なんだよこの記事。意味不明過ぎる。

いや、確かに嘘は書いて無いんだが、なんで知ってるんだ。

「栞さん！？これはどういうことですよ！？」

がくがくと俺の襟首を掴んで揺らしてくるセシリア。

かれこれ10分間この状態なのだから頭がぼーっとして来て意識がとびそうだ。

「栞！どうしたことよ、これ！」

『貧乳』という部分を指しながら鈴が来た。

その通りじゃねエか、貧乳、とは言わないぞ。

「あなた……あなたですわね！？」

「な、なにがよ」

「これですわ！デートだなんてわたくしですらしていないのに……」

「ふーん。で、あんた栞とどういう関係なの？」

「聞いて驚きなさい！わたくし、セシリア・オルコットは栞さんとかれこれ1ヶ月ほど同居しておりますよ」

「なっ……栞イ！」

やっと解放された。

鈴もそんな記事気にする前に俺を助けてくれれば良かったのに。さて、行くか。

こんな記事作るのは恐らくあの2年の……なんていったか。副部長しかいねエ。

そして俺が昨日食堂にいたことを知る人物はのほほんさんだけだ。のほほんさん、のほほんとしてる癖にやってくれる。

「どこに行きますの？話はまだ終わって無くってよ？」

終わりそうにないから逃げようというのがわからないのか。

しかも鈴までいるんだ。

逃げるのは普通だろう。

「待ちなさいよ、椋。話はまだ終わってないんだからね？それにどういうことよ。こんな女と同じ部屋なんて」

聞いて字の如くだろう。

わざわざ聞く必要があることか？

「なにをもってこんな女と申すのかしら。あなたのように礼儀も知らない方には『こんな』などと言われたくはありませんわ」

なんでこう、セシリアは人と仲良く出来ないんだろうか。

ライバル視でもしてんの？

「そう。まあ育ちが良くないから。それで話は終わり？あたし椋に用事があるんだけど」

どっちもどっちだな。

似たものどうし仲良く出来そうなものなのに。

「わたくしも桜さんに用がありますの。ですからわたくしが先ですわ」

「なにがですからなのよ。あたしも用があるんだからあんたが後から話さないよ」

はあ……。

こいつらもうちょっと静かにしてくれないかな。

「もみりーん」

とろとろとこつちに歩み寄って来るそれ。

ほう、よく俺の前に来れたものだな。

「いやあ、昨日は面白そうだったから、ついつい新聞部の人に教えちゃったんだよねー」

やっぱり真犯人はこの人らしい。

面白半分でそうやって俺を貶めるのはやめていただきたいのだが。

「面白半分じゃないよー。面白全部だよー」

日本語としてどうなのか。

そんなツツコミはいいので、そっちの方が性質が悪いだろ。そしてのほほんと心を読むな、心を。

「のほほんじゃないよ。キリッ、とだよ」

いや、もう勘弁してくれ。

のほほん、とでもキリッ、とでも心を読むのは禁止だ！

「はい！じゃあね〜」

あの人が何気にすごくないか？

いや、割と本気で。

「「^{さん}桜！」」

のほほんさんより今はこっちの方が性質が悪いな。
2人で攻めてくるとか卑怯以外のなんでもないぞ。

「あつ、そういえばクラス対抗戦鈴が相手らしいな」

「そうだけどなによ」

……話を膨らませようとは思わないのか？

それじゃあ俺が答えて「ふーん、そう」で終わるじゃねエか。

「だから……その……セシリア！いっしょに訓練よろしくな！」

「まあそこまで言われたら仕方ありませんわね。特別にコーチをしてあげますわ。なにせ代表候補生ですから」

俺にじゃない。

鈴に向かってふふんと嘲笑するように言って見せた。

いつもは自分から誘ってくれるんだけどね、一夏も一緒に。

「それならあたしが教えてあげるわよ。あたしも代表候補生だし」

「敵の施しなんて受けませんわ。ねえ、椀さん」

「いや。みんなで……」

「どっちか選びなさい」

「どちらか選んでくださる？」

「う、うわあああああ！」

今日も俺の喉は絶好調であった。

いや、それにしてもトッポってすごいよな。
最後までチヨコたっぷりだもん。

青春日記10日目 秋山モミジの憂鬱

「やっぱり小さい方がいいのかなあ」

「そう？私は大きい方がいいと思うけど……」

「でも小さいのは秋山くんの好みだよ？それだけで一歩リードじゃん」

そんな会話が繰り広げられるのはいかなものか。

あの新聞が発行されてからというものの、『貧乳はステータス！』みたいな風潮がIS学園で起こり始めている。

風紀乱れ過ぎだろ。

悪魔がどうにかしてくれんものかね。

「誰が悪魔なのだ？言ってみろ秋山」

心臓が止まるかと思った。

授業中にぼーっとしていた俺が悪いんだが、その冷ややかで冷徹な視線を向けられると集中していても心臓が止まりそうだ。

というか息が詰まる。

そしてやっぱり心を読まれた。

俺は知らず知らずのうちに声に出しているのだろうか。
試しに言ってみるか。

この悪魔め！

「ほう、2度も言うとは度胸がある。その度胸は認めるが態度は許さん」

パンパンッ！

2度殴られた。あのダイヤの硬度とゴムの靱性を併せ持つ最強の武器である出席簿で。ファイナルカッター

やはり心の声が漏れているのか。

今度からは言うのはよそう。悪魔と。

パンッ！

……解せぬ。

「お前の姉ちゃんおかしいぞ」

「俺もよく心を読まれることがあるからその気持ちはよくわかる。だから考えない様にはしてるんだけどな」

あの悪魔はホントにおかしい。

今はいないから良いものの近くにいます時に少しでも心の中で悪態を吐いてみる、確実に脳細胞を5千個ころしてくる。

いや、実は同時に3回叩かれてるが気付いていない！？

秘剣・燕返し

みたいな要領で1万5千個殺している可能性もあるな。

「そついうこと考えるからいけないんじゃないのか？」

「じゃあどうということ考えるんだよ。あれはあの人を見て『悪魔』『呂布』『鬼畜』『美人』くらいしか思いつかんぞ」

「最後のでいいだろ」

「あの人に直接美人って言うてみる。どうなるか想像がつくだろ？」

「ああ、確かに」

確実に無表情で殴られるぞ。

見た目は美人　　と言ってもかなり目が鋭くキツイ表情してるから
近寄りがたいが　　なのに心は悪魔だ。
色恋沙汰には興味が無いのか。

パンパンッ！

どうやら瞬間移動まで身につけてしまった様だ。
恐ろし過ぎる。

今日1日だけで脳内細胞モミジちゃんが約百万人くらい殺された。
つまり二百近く殴られた。厄日だな、こりゃあ。

あの人は俺の脳内戦争が起こっている時に現れたら英雄だな。

1人殺せば犯罪者、数千人殺せば英雄。

1人殺せば犯罪者、百万殺せば独裁者、全滅させれば神になれる。
などという言葉を作るからいけないんだ！偉人の馬鹿野郎！

「（つまり俺の脳細胞を千冬さんが全滅させれば俺の中で神格化される……。理不尽過ぎるだろう）」

「なにをぶつぶつ言っているんですの？さ、早く行きますわよ」

いや、もう殴られた事は忘れよう。

今日が厄日なわけが無い。ただちよつと気が緩んでただけ。

よし！ポジティブシンキング！

「ああ、そうだな。おーい、一夏！お前も来る……。だろ……。？」

一夏の方を見てみると思わず尻切れになってしまった。
いや、なにをやっているんだ？

「キャー！篠ノ之さんだいたーん」

一人の女子が声を上げると、それに反応してみんなが即座に一点を向く。

すごいなこれ。

統率力というか、女子力だな。意味は良くわからんが。

何が起きているか説明すれば、女子の声の通り、篠ノ之箒さんが大胆な行動をとったのだ。

とったというか事故だろうな。

こけそうになつて一夏の方に倒れ込み、そのまま顔面を下腹部辺りに埋める、という感じが。

「ち、違う！これはだな！事故であつて故意では……。いや、恋だ！？」

「故意なんだー」

「ちがつ！故意ではない！事故だ！恋だが……」

ややこしいな。字幕付けないとわからんぞ、どっちがどっちか。
一夏は当然これそうにないな。

「じゃあ今日は2人でやるか！」

「は、はい！」

（ふ、ふ、ふふ、ふふふふ……二人きり！これであの鈴さんから
一歩リードですわ！）

隣で妙な笑い声が聞こえた気がしたが、気にしなくて良いか。

しかし、2人って言った瞬間セシリアの表情がめっちゃめっちゃ輝いた
な。

そこまでされると嬉しいもんだ。

「遅いじゃない、桜」

やっぱり今日は厄日だ。

いつもの如く第3アリーナについたら、その瞬間鈴の登場でセシリ
アのご機嫌は真逆さま。

さっきまでのぼわぼわしたお花畑はどこへやら、途端に鈴を睨む。

「なぜあなたがいますの？ここはわたくしたちが許可を貰って借り
ているんですよ？関係者以外立ち入り禁止ですわ」

しかし表情とは裏腹に冷静に対処しようとするセシリア。
俺はどっちの味方もする気が無いので黙って見ているだけ。

「あたしは椀の幼馴染。関係者よ」

まあそうなるのかな。

一夏のファースト幼馴染が篤さんでセカンド幼馴染が鈴であるように、鈴のファースト幼馴染が俺でセカンド幼馴染が一夏と説明すればわかり易いか。

「ぐぬっ……まあでも？椀さんと約束を最初に取りつけていたのはわたくしなので」

「うつ……」

セシリアの得意げな表情で鈴は押し黙る。

約束。

それは守るべきものであり、守らなければならないもの。

それを破ることをしないのは2人とも承知の上か、やたらと約束には弱い。

「じゃ、じゃあ今から出かけましょ！」

「……は？」

なんでそうなるんだよ。

平日だろうが、今日は。

「約束よ、約束！デートの！」

「んなっ……それは卑怯ですわ！」

「約束してたんだからしょうがないでしょ！」

「それは……！！椛さん、なんとか言い返してさしあげて！」

なんで俺に振るかな。

「いいのか？今日はもう時間がないし、休みの日に1日中遊んだ方がいいだろ」

俺の言葉に押し黙る2人。

なにかまずいことでも言ったか？

俺は2人とも平等に時間が裂けるような提案をしたはずなんだが。

「……それなら仕方ないわね。椛がドーーーしても1日中一緒にいたいって言うんなら今日は帰るわ」

「お待ちなさい！鈴さんがどうして今日行きたいというのなら今日は引き下がっても構いませんことよ？」

「うっん。今日は帰るわ。その代わり椛、約束だからね」

「ああ、じゃあな」

これ以上2人一緒にいるとISの訓練どころじゃない。

俺のISは本当に訓練が必要なんだよ。

そもそもサーヴァントはいわゆる欠陥品で、専用武器も搭載しておらず、拡張領域もない、しかもシールドバリアーが薄く、ISから

の攻撃は全て絶対防御が反応して大きくシールドエネルギーが削られる。

だからISから攻撃を貰えば身体ダメージも確実に蓄積されて動きも鈍るという糞仕様。

故に特訓で相手から攻撃を貰わない様に立ちまわることが必要だ。

まあシールドエネルギーを消費して全て遠き理想郷を投影している間は完全無敵というチートではあるのだが。

それでも最初から大きくシールドエネルギーを削ってアドバンテージを与えるのは不利だろう？

「……桜さん！」

「なに？時間が勿体ないからさっさとやろうぜ」

「そうですわね。しかしあとでゆっくりとお話したいことがありますので」

今日のISの特訓がずっと続けばいいのになあ……。セシリアには悪い意味で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4230v/>

紅葉色の青春日記

2011年8月7日03時33分発行